改訂新女子國文 四年制 巻八

375.9
Hi19
資料室

42458
教科書文庫
4
810
42-1941
200030
1752

文部省檢定濟

昭和十六年八月十五日　高等女學校國語科教科書

改訂 新女子國文

東京帝國大學教授文學博士 久松潛一編

東京 至文堂

資料室

375.9
H519

閑來放鶴

夏目漱石筆

廣島大學圖書之印

広島大学 教 34761 図書

改訂

新女子國文

四年制　卷八

目次

一　五重塔　幸田露伴　一
二　鹽原　尾崎紅葉　二
三　秋　樋口一葉　七
四　一夕觀　北村透谷　二四
五　おえふ　島崎藤村　二八
六　信濃路の旅　正岡子規　三三

七 長柄堤の訣別　坪内逍遙　四三
八 焚火　國木田獨歩　五七
九 山路　夏目漱石　六九
一〇 高瀬舟　森鷗外　八二
一一 國文學の精神　九九
一二 鳥居　岸田日出刀　一一〇
一三 家　和辻哲郎　一二二
一四 紋章　沼田頼輔　一三三
一五 料理　谷崎潤一郎　一四三
一六 表情　小泉八雲　一四七

一七 言葉　山田孝雄　一五三
一八 神祕の日本　野口米次郎　一六一
一九 忠孝一本（國體の本義）　一七〇

廣島大學圖書之印

改訂

新女子國文

四年制　卷八

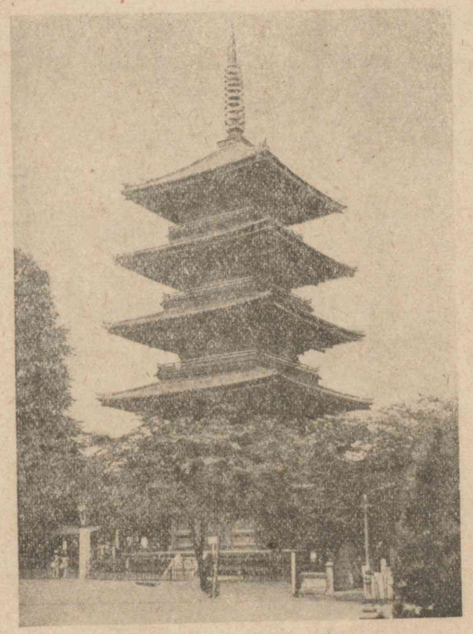
一　五重の塔

幸田露伴

幸田露伴
名は成行
小説家
文學博士
二五二七年生
のつそり十兵衛
大工の名

時は一月の末つ方、のつそり十兵衛が辛苦經營むなしからで、感應寺生雲塔いよ〳〵物の見事に出來上り、段々足場を取除けば、次第々々に露るゝ一階また一階、五重巍然と聳えし樣、金剛力士が魔軍を睨んで十六丈の姿を現じ、地軸搖がす足ぶみして、巖に突立ちたる如く、天晴れ立派に建つたるかな、あら快き細工振りかな、希有ぢや、未曾有ぢや、またあるまじと爲右衛門より門番までも、初手のつそりと輕しめたる事は忘れて

讃歎すれば、圓道はじめ一山の學徒も、躍上つて喜び、これでこそ感應寺の五重塔なれ、あら嬉しや、我等が賴む師は當世に肩を比すべき人もなく、八宗九宗の碩德達、虎豹鵠鷺と勝れ給へる中にも、絶類拔群にて、譬へば獅子王・孔雀王、我等が賴む此の寺の塔も絶類拔群にて、奈良や京都はいざ知らず、上野・淺草・芝山内、江戸にてこれに勝るものなし、殊更塵土に埋れて光も放たず終る



天王寺五重塔

達膩伽尊者
建築に巧な釋迦の弟子

べかりし男を拾上げられて、心の珠の輝を世に出されし師の美德、困苦に撓まず知己に酬いて、遂に仕遂げし十兵衞が賴もしさ、面白く又美はしき奇因緣なり妙因緣なり、天の成せしか、人の成せしか、將又諸天善神の陰にて操り給ひしか、屋を造るに巧なりし達膩伽尊者の噂はあれど、世尊在世の御時にも快き事ありしを未だ聞かねば、唐にも聞かず、いで落成の式あらば、我、偈を作らん、文を作らん、我歌をよみ詩をなして、頌せん、讃せん、詠ぜん、記せんと、各〻互に語り合ひしは、慾のみならぬ人の情の、優しくもまた殊勝なるに引替へて、測り難きは天の意、圓道、爲右衞門二人が計らひとして、いと盛なる落成式執行の日も略〻定まり、其の日は貴賤男女の見物を許し、貧者に剩れる金を施し、十兵衞其の他を犒ひ賞する、一方には又伎樂を奏して、

世に珍しき塔供養あるべき筈に、支度とり〳〵なりし最中、夜半の鐘の音の曇つて、常には似つかず耳にきたなく聞えしが漸うあやしき風吹出して、眠れる兒童も、我知らず夜具踏脱ぐほど、時候生暖くなるにつれ、雨戸のがたつく響烈しくなりまさり、闇に揉まるゝ松柏の梢に天魔のさけび物凄くも、人の心の平和を奪へ、平和を奪へ。浮世の榮華に誇れる奴等の膽を破れや、睡を攪せや。愚物の胸に血の濤打たせよ。僞物の面の紅き色奪れ。斧もてる者斧を揮へ。矛もてる者矛を揮へ。汝等が鋭き劍は饑ゑたり。汝等劍に食を與へよ。人のあぶらはよき食なり。汝等劍に飽くまで食はせよ。飽くまで人のあぶらを餌へ。」と號令嚴しく發するや否や、猛風一陣どつと起つて、斧をもつ夜叉、矛もてる夜叉、餓ゑたる劍もてる夜叉、皆

一齊に暴れ出しぬ。

長夜の夢を覺まされて、江戸四里四方の老若男女、惡風來れりと驚き騷ぎ、「雨戸の横柄子しつかりと插せ、辛張棒を強く張れ」と、家々毎にうろたふるを、あはれとも見ぬ飛天夜叉王、怒號の聲音たけ〳〵しく、「汝等人を憚るな。汝等人に憚られよ。人は我等を輕んじたり、久しく我等を賤しみたり。我等に捧ぐべき筈の定めの牲を忘れたり。這ふかはりとして立つて行く狗、驕奢の塒作れる禽、尻尾なき猿、物言ふ蛇、つゆ誠なき狐の子、汚穢を知らざる豕の女、彼等に長く侮られて、遂に何時まで忍び得ん。我等を長く侮らせて、彼等を何時まで誇らすべき。忍ぶべきだけ忍びたり。誇らすべきだけ誇らせたり。汝等暴れよ、今こそ暴れよ。何十年の恨の毒氣を彼等に返せ。

鐵圍山
須彌山の外圍

一時に返せ。彼等が驕慢の氣の臭さを鐵圍山外に攫んで捨てよ。彼等の頭を地につかしめよ。無慈悲の斧の刃味の好さを彼等が胸に試みよ。慘酷の矛、瞋恚の劍の刃糞と彼等をなしくれよ。彼等が喉に氷を與へて、苦寒に怖れわなゝかしめよ。彼等が膽に針を與へて、祕密の痛みに堪へざらしめよ。彼等が眼前に彼等がなしたる多くの奢侈の子孫を殺して、玩物の念を嗟歎の灰の河に埋めよ。彼等は蠶の家を奪ひぬ、汝等彼等の家を奪へや。彼等は蠶の智慧を笑ひぬ。汝等彼等の智慧を讃せよ。すべて彼等の巧とも思へる智慧を讃せよ。大とおもへる意を讃せよ。美はしと自ら思へる情を讃せよ。協へりとなす理を讃せよ。剛しとなせる力を讃せよ。すべては我等の矛の餌なれば、劍の餌なれば、斧の餌なれば、讃して

後は利器に餌ひ、よき餌を作りし彼等を笑へ。なぶらるゝだけ彼等をなぶれ。急に屠るな、なぶり殺せ。活かしながらに一枚々枚皮を剝取れ、肉を剝取れ。彼等が心臓を鞠として蹴よ。枳棘をもて背を鞭て。歎息の息、涙の水、動悸の血の音、悲鳴の聲、其等をすべて人間より取れ。殘忍の外快樂なし。酷烈ならずば、汝等疾く死ね。暴れよ、進めよ。無法に住して放逸無慚、無理無體に暴れ立て、〳〵。進め、〳〵。神とも戰へ佛をも擲け。道理をやぶつてやぶり捨てなば、天下は我等が物なるぞ。と、叱咤する度、土石を飛ばして、丑の刻より寅の刻、卯となり辰となるまでも、ちつとも止まず勵まし立つれば、數萬の眷族勇みをなし、水を渡るは波を蹴かへし、陸を走るは沙を蹴かへし、天地を塵埃に黄ばませて、日の光をもほと〳〵掩ひ、斧

を揮つて、數寄者が手入れ怠りなき松をあざ笑ひつゝ、ほつきと斫るあり。矛を舞はして、板屋根に忽ち穴を穿つもあり。ゆさ〳〵と怪力もて、さも堅固なる家を動かし、橋を搖がす者もあり。「手ぬるし、手ぬるし、酷さが足らぬ。我に續け」と憤怒の牙嚙鳴らしつゝ、夜叉王の躍り上つていらだてば、虛空に充ち滿ちたる眷屬、をたけび鋭くをめきさけんで、遮二無二暴威を揮ふ程に、神前・寺内に立てる樹も、富家の庭に養はれし樹も、聲振絞つて泣悲しみ、見る〳〵大地の髮の毛は、恐怖に一一豎立なし、柳は倒れ竹は割るゝ折しも、黑雲空に流れて、樫の實より大きなる雨ばら〳〵と降出せば、得たりと益暴るゝ夜叉、垣を引捨て、塀を蹴倒し、門をも壞し、屋根をめくり、軒端の瓦を踏碎き、たゞ一揉に屑屋を飛ばし、二揉揉んでは二階を捻取り、三たび揉んでは某寺を物の見事に潰し崩し、どう〳〵どつと鬨を揚ぐる其の度毎に、心を冷し、胸を騷がす人々の、彼に氣遣ひ、此に案ずる笑止の樣を見ては喜び、居所さへもなくされて悲しむものを見ては喜び、いよ〳〵圖に乘り、狼藉のあらん限りを逞しうすれば、八百八町百萬の人、皆生ける心地せず、顏色更にあらばこそ。中にも分けて驚きしは圓道・爲右衞門、折角僅かに出來上りし五重塔は、揉まれ揉まれて九輪は搖ぎ、頂上の寶珠は空に得讀めぬ文字を書き、岩をも轉ばすべき風の突掛け來り、楯をも貫くべき雨のぶつつかり來る度、撓む姿、木の軋る音、もどる姿、又撓む姿、軋る音、今にも覆らんずる樣子なり。「あれ〳〵危し、仕樣はなきか、覆られては大事なり、止むる術もなき事か、雨さへ加はり來りし上、周りに樹木もあらざれ

ば、未曾有の風に土臺狹くて丈のみ高き此の塔の堪へんこといと覺束なし。本堂さへも斯程に動けば、塔は如何ばかりぞ。風を止むる呪文はきかぬか。斯く恐しき大あらしに、見舞に來べき源太は見えぬか。まだ新しき出入なりとて、重々來ては叶はざる十兵衛見えぬが寬怠なり。ひとさへ斯程氣づかふに、己がせし塔氣にかけぬか。あれ〳〵危し、また撓んだは。誰か十兵衛呼びに行け。といへども天に瓦飛び、板飛び、地上に砂利の舞ふ中を行かんといふものなく、漸く褒美の金に飽かして掃除人の七藏爺を出だしやりぬ。

（五重塔）

尾崎紅葉
名は德太郎
小說家
明治三十六年
歿

西那須野の驛
栃木縣那須郡

二　鹽原

尾崎紅葉

車は駛せ、景は移り、境は轉じ、客は改れど、我はかはらざる其の悒鬱を抱きて、遣る方無き五時間の獨りに倦疲れつゝ、始めて西那須野の驛に下車せり。

直ちに西北に向かひて、今なほ茫々たる古の那須野が原に入れば、天は闊く、地は遐かに、たゞ平蕪迷ひ、斷雲飛ぶのみにして、三里の坦途、一帶の重巒、鹽原は其處ぞと見えて、ゆくほどに路は窮らず。漸く千本松を過ぎ、進みて關谷村に到れば、人家の盡くる處に淙々の響ありて、これに架れるを入勝橋となす。

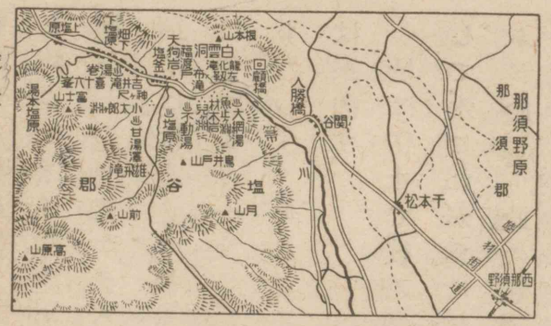
輒ち橋を渡りて僅かにゆけば、日光暗く、山厚く疊み、嵐氣冷やかに、壑深く陷りて、幾めぐりせる九折の、後には密樹に聲々

嶺上の松の調
琴の音に峯の松風かよふ
しいづれの緒よりしらべ初めけむ
（齋宮女御）

の鳥鳴き、前には幽草歩々の花を發き、愈〻登れば、遙かに木がくれの音のみ聞えし流の水上は淺く露れて、すはや、こゝに空山の雷、白光を放ちて頽れ落ちたるかと、凄じかり。道の右は山を削りて長壁となし、石幽に蘚碧うして、幾條ともなく白絲を亂し懸けたる細瀑小瀧の珊々として濺げるは、嶺上の松の調も、定めて此の緒よりやと見捨て難し。

車を驅りて白羽坂を踰えてより、回顧橋に三十尺の飛瀑をふみて、山中の景は始めて奇なり。これよりゆきて、道あれば水あり、水あれば必ず橋あり、全溪にして三十橋。山あれば巖あり、巖あれば必ず瀑あり、全嶺にして七十瀑。地あれば泉あり、泉あれば必ず熱あり、全村にして四十五湯。なほ數ふれば十二勝、十六名所、七不思議、誰か一々探り得べき。

抑、鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より群峯の間を分けて深く西北に入り、綿々として箒川の流に泝る片岨にして、到る處巖の水を夾まざるなきは、さながら青銅の藥研に瑠璃末を碎くに似たり。



鹽原地方圖

先づ大網の湯を過ぐれば、根本山・魚止瀧・兒ケ淵、左靱の險は古りて、白雲洞は朗かに、布瀧・龍が鼻・材木石・五色岩・船岩なんどと眺めゆけば、鳥居戸・前山の翠衣に染みて、福渡戸の里に入るなり。

途すがら、前面の崖の處々に躑躅の殘り、山藤の懸れるが、甚だ興あり。此の邊殊に谿淺く水澄みて、大いなる古鏡の沈めるが如く、深く

蔽へる岸樹は陰々として眠るに似たり。名を問へば、不動澤といふ。遙かに望めば、ゆく手の雲間に塞がりて、咄々、何等の物かと先づ驚かさるゝ屏風巖、地を拔く何百丈と見上ぐる絶頂には、ばら〳〵松も危く立竦み、から竹割に割放したる斷面は半空より一文字に垂下して、岌々たる其の勢、幾ど眺むる眼も留らず。「あれこそ名にし負ふ天狗巖なれ」と遙かにも車夫は案内す。

足に任せて、彼の巖の頭上に聳ゆる邊に到れば、谿急に激折して、水これが爲に鼓怒し、咆哮し、噴薄激盪して、奔馬の亂れ競ふが如し。此の亂流の間に横たはりて、高さ二丈に餘り、其の頂は平かに闊がりて、寛かに百人を立たしむべき大磐石、風雨に歳經る膚は死灰の色をなして、鱗も添はず、毛も生ひざれど、

蒲生飛驒守氏郷
會津の領主
一二五五年歿

清琴樓
溫泉宿
富士
鹽原富士

かたち恐しげに蹲りて、老木の蔭を負ひ、急湍の浪に漬りて、夜な夜な天狗巖の魔風に誘はれて吼えもしぬべき怪しの物なり。「其の昔、蒲生飛驒守氏郷此の處に野立せしことあるに因りて、野立石と申す」と車夫のいふ。

牽ゐたる車に乘りて急ぐ。甘澤湯・小太郎が淵など思ひやりつゝ、いつしか畑下里の里に著きぬ。

一村十二戸、溫泉は五箇所に涌きて、五軒の宿あり。こゝに清琴樓と呼べるは、南に方りて箒川の緩く廻れる磧に臨めり。俯せば水石の粼々たるを見仰げば西に富士・喜十六の翠巒と對して、清風座に滿ち、袖の澤を落ちくる流は二十丈の絶壁に懸りて、素練を垂れたる如き吉井瀧となり、東北は山また山を重ねて、琅玕の玉簾深く一望の下、丘壑の富を擅にし、林泉の奢

を窮めらるゝなど、またあるまじき清福の別境なり。

我は此の繪を看る如き清穩の風景にあひて、彼の途上險しき巖と峻しき流との爲に、幾度か魂飛び肉銷して理むる方なく搔亂されし胸の中は、靄然として頓に和らぎ、恍然として總べてを忘れたり。誠に好くこそ我は來つれ。胡ぞ來るの甚だ遲かりし。看よ、看よ、木々の綠も、浮かべる雲も、秀づる峯も、流るゝ溪も、峙つ巖も、吹來る風も、日の光も、鷄の鳴く音も、空の色も、皆自ら浮世の物ならで、我はこゝに憂を忘れ、悲しみを忘れ、苦しみを忘れ、勞れを忘れて、身は彼の雲と輕く、心は此の水と淡し。

（金色夜叉）

樋口一葉
名は夏子
小說家
明治二十九年
歿

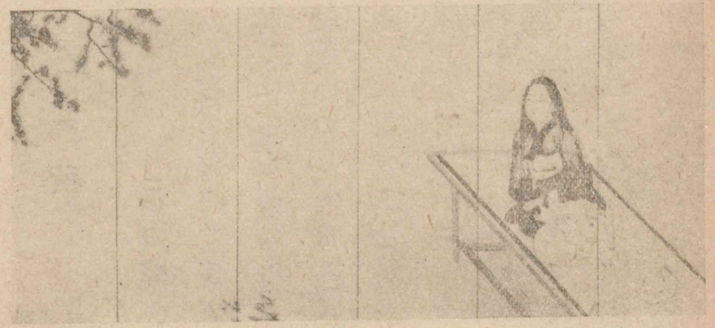
三秋

樋口一葉

蟲の聲

垣根の朝顏やう〳〵小さく咲きて、昨日今日葉がくれに一花見ゆるも、そのはじめのことおもはれてあはれなるに、松蟲、鈴蟲、いつしか鳴きよわりて、朝日まちとりてこほろぎの果敢なげに聲する、小溝の端、壁の中などあるかなきかの命のほど、老いたる人、病める身などに聞きたらばさこそ比べられてものかなしからん。

まだ初霜は置くまじきを、今年は蟲の齡いと短くて、はやくに聲のかれ〳〵になりしかな。くつわ蟲はかしましき聲もかたちも、いと丈夫めかしきを、いつしか時の間におとろへ行



蟲の音

くらん。人にもさるたぐひはありけりとをかし。鈴蟲はふり出でてなく聲のうつくしければ、物ねたみされて齡の短きなめりとうなづかる。

松蟲も同じことなれど、名と實と伴なはねばあやしまるゝぞかし。常磐の松を名に呼べれば、千歳ならずとも枯野の末まではあるべきを、萩の花ちりこぼるゝやがて聲せずなりゆく。さるさかりの短きものなれば、暫しも似よと、この名は負は

（右　同）

せけん。名づけ親ぞ知らまほしき。この蟲一とせ籠に飼ひて、露にも霜にも當てじといたはりしが、その頃病にふしたりし兄の、夜なゝ鳴くこゑ耳につきて、ものわびしく厭はしく、あの聲なくばこの夜やすく睡らるべしなどいへるも道理にて、いそぎとりおろして庭草の茂みに放ちぬ。その夜鳴くやと試みたれど更に聲のきこえねば、俄に露の身に寒く、鳴くべき勢のなくなりしかとあはれみ合ひし。そのとし暮れて、

兄は空しき數に入りつ。

又の年の秋、今日ぞこの頃など思ひ出づる折しも、ある夜ふけて近き垣根のうちに、さながらの聲きこえ出でぬ。よもあらじとは思へど、たゞそのもののやうに懷かしく、戀ひしきにも珍しきにも涙のみこぼれて、この蟲がやうに、よしことものなりとも、聲かたち同じかるべき人の、たゞ今こゝに立出で來らば如何ならん。われはその袖をつと捉へて放つことをなずまじく、母は嬉しさにものはいはれで涙のみふりこぼし給ふや、父は如何さまになし給ふらんなど怪しきことを思ひよる。かくて二夜ばかりは鳴きつ。その後は何處に行きけん、假にも聲のきこえずなりぬ。

今も松蟲の聲きけば、やがてその折思ひ出でられてものが

なしきに籠に飼ふことは更にも思ひ寄らず、おのづから野邊に鳴弱りゆくなど、たゞその人の別れのやうに思はるゝぞかし。

樋口一葉

雨の夜

庭の芭蕉のいと高やかに延びて、葉は垣根の上やがて五尺もこえつべし。今年は如何なればかくいつまでも丈のひくきなどいひてしを、夏の末つかた極めて暑かりしにたゞ一日、二日、三日とも數へずして、驚くばかりになりぬ。秋かぜ少しそよ〳〵とすれば、端のかたよりはかなげに破れて、風情次第に淋しくなるほど、

雨の夜の音なひ、これこそはあはれなれ。

こまかき雨ははら〳〵と音して叢がくれ鳴くこほろぎのふしをも亂さず、風一じきり颯と降りくるは、彼の葉にばかりかゝるかといたまし。雨はいつもあはれなる中に、秋はまして身にしむこと多かり。

更けゆくまゝに燈火のかげなどうら淋しく、寢られぬ夜なれば臥床に入らんも詮なしとて、小切入れたる疊紙とり出し、何とはなしに針をもとられぬ。まだ幼くて伯母なる人に縫物ならひつる頃、衽先・褄の形などむづかしういはれし、いと恥づかしうて、これ習ひ得ざらんほどはと、家に近きそれの社に日參といふことをなしける、思へばそれも昔なりけり。をしへし人は苔の下になりて、習ひとりし身は大方もの忘れしつ。

かくたまさかにとり出づるにも、指の先こはきやうにて、はかばかしうはえも縫ひがたきを、彼の人あらば如何ばかりいふ甲斐なくあさましく思ふらんなど、打返しそのむかしの戀ひしうて、そゞろに袖もぬれそふ心地す。

遠くより音して歩み來るやうなる雨、近き板戸に打ちつけの騷がしさ、いづれも淋しからぬかは。老いたる親の痩せたる肩もむとて、骨の手に當りたるも、かゝる夜はいとゞ心細さのやるかたなし。

（一葉全集）

北村透谷
名は門太郎
詩人
明治二十七年
歿

四一夕觀

北村透谷

ある宵、我、窓にあたりて横たはる。ところは海の郷、秋高く、天朗かにして、よろづの象よろづの物、凜乎として我に迫る。恰も我が眞率ならざるを笑ふに似たり。恰も我が倘促たるを嘲るに似たり。恰も我が力なく、能なく、辨なく、氣なきを罵るに似たり。彼は斯の如く我に徹透す。而して我は地上の一微物、彼に悟達することの甚だ難きは如何ぞや。

月は晩くして未だ上るに及ばず。仰いで蒼穹を觀れば、無數の星宿紛糾して、我が頭にあり。顧みて我が五尺を視、更に又内觀して我が内なるものを察するに、彼と我との距離甚だ遠きに驚く。不死・不朽、彼と與にあり、衰老・病死、我と與にあり。

鮮美透涼なる彼に對して、撓み易く、折れ易き我、如何に赧然たるべきぞ。爰に於て、我は一種の悲慨に擊たれたるが如き心地す。聖にして熱ある悲慨、我が心頭に入れり。罵者の聲、耳邊にあるが如し。我が爲すなきと、我が言ふなきと、我が行くなきとを責む。我、起つて茅舍を出で、且仰ぎ、且俯して、罵者に答ふるところあらんと欲す。胸中の苦悶、未だ全く解けず。行く〳〵秋草の深きところに至れば、忽ち聽く、蟲聲縷の如く耳朶を穿つを。これを聽きて我が心は一轉せり。再びこれを聽きて悶心更に明らかなり。さきに苦悶と思ひしは苦悶にあらざりけり。看よ、唧々として秋を悲しむが如きもの、彼に於て何の悲しみかあらむ。彼を悲しむと看取せんか、我も亦悲しめるなり。彼を吟哦すと思はんか、我も亦吟哦してあ

るなり。心境一轉すれば、彼も無く、我も無し。邈焉たる大空の、百千の提燈を掲げ出せるあるのみ。

我は歩して水際に下れり。浪白くして萬古の響を傳へ、水蒼々として永遠の色を宿せり。手を拱きて蒼穹を察すれば、我、「我」を遺れて、飄然として襤褸の如き「時」を脱するに似たり。

茫々乎たる空際は歴史の醇の醇なるもの、ホーマーありし時、プラトンありし時、彼の北斗は今と同じき光芒を放てり。同じく彼を照らせり、同じく我を照らせり。然り、人間の歴史は多くの夢想家を載せたりと雖も、天涯の歴史は太初より今日に至るまで大なる現實として殘れり。人間はこれを幽奥として畏るゝと雖も、大なる現實は、始より終まで現實として

殘れり。人間は、或は現實を唱へ、或は夢想を稱へて、これを以て調和すべからざる原素の如く諍へる間に天地の幽奥は依然として大なる現實として殘れり。

我は自ら答へて、安らかなる心を以て蓬窓に反れり。我が視たる群星は、未だ念頭を去らず。靜かに燈を剪つて書を讀まんとするに、我が心はなほ彼にあり。我の讀まんとする書は彼にあり。漠々たる大空は思想の廣き歴史の紙に似たり。吁、悠々たる天地限りなく窮りなき天地、大なる歴史の一枚、これに對して暫く茫然たり。

（北村透谷集）

島崎藤村
名は春樹
小説家　詩人
明治五年生

五　おえふ

島崎藤村

一

處女ぞ經ぬるおほかたの
われは夢路を越えてけり
わが世の坂にふりかへり
いく山河をながむれば

水靜かなる江戸川の
流の岸にうまれいで
岸のさくらの花影に
われは處女となりにけり

晩春の別離
千曲川旅情の歌
柳の実
911.5
3
911.5
14
藤村詩集
藤村詩帳

都鳥浮く大川に
流れてそゝぐ川添の
白菫さく若草に
夢多かりしわが身かな

雲むらさきの九重の
大宮内につかへして
清涼殿の春の夜の
月の光に照らされつ

五

雲を彫め濤を刻り
霞をうかべ日をまねく

玉の臺の欄干に
かゝるゆふべの春の雨

さばかり高き人の世の
輝くさまを目にも見て
ときめきたまふさま〳〵の
ひとのころもの香をかげり

きらめき初むる曉星の
あしたの空に動くごと
あたりのひかりきゆるまで
さかえのひとのさまも見き

天つみそらを渡る日の
影かたぶけるごとくにて
名の夕暮に消えてゆく
秀でしひとのはても見き

春しづかなる御園生の
花に隱れてひとを哭き
秋のひかりの窓に倚り
夕雲とほき友を戀ふ

ひとりの姉をうしなひて
大宮内の門を出で

けふ江戸川に來て見れば
秋はさみしきながめかな

さくらの霜葉黄に落ちて
ゆきてかへらぬ江戸川や
流れゆく水靜かにて
あゆみは遲きわがおもひ

おのれも知らず世を經れば
若き命にたへかねて
岸のほとりの草を藉き
微笑みて泣くわが身かな

（若菜集）

六 信濃路の旅

正岡子規

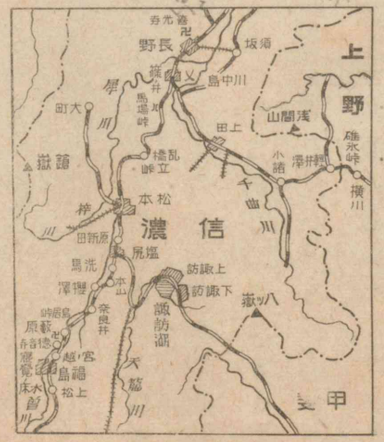
上野より汽車にて横川に行き、馬車にて碓氷峠を越ゆ。鳥の聲耳もとに落ちて、見上ぐれば千仞の絶壁、百尺の老樹、聳え聳えて天も高からず。樵夫の歌、足もとに起つて、見おろせば、蔦かづらを傳ひて渡るべき谷間に、腥き風さつと吹きどよめきて、萬山自ら震動す。遙かに來し方を見かへるに、山また山峨々として、路いづくにかある。寸馬豆人といへるは彼かとばかり疑はれて、

つゞら折いく重の峯をわたりきて雲間にひく
き山もとの里

日もやゝ暮れかゝれば、四方濛々として、山とも知らず、海と

も知らず。駈上る駒の蹄に踏散らす雲霧のあはひを見れば、一歩の外は削りたてたる嶮崖の底も幽かにて、いと怖し。登れども登れども窮る所を知らず。山々高く、雲愈低し。

輕井澤はさすがに夏なほ寒く、隙間漏る淺間おろしに一重の旅衣、見果てぬ夢を護るに難かり。例ならず疾く起出でて窓を開けば、幾重の山嶺屏風を繞らして、草のみ生ひ茂りたれば、その色、染めたらんよりも麗し。



信濃地方圖

山々は萌葱淺葱やほと、ぎす

淺間は雲に隱れて、煙もいづこにたち迷ふらんと思はる。汽車を驅りて善光寺に詣で、それより川中島を過ぐ。古戰場はいづくのほどとも知らねど、山と山とに圍まれて、犀川のめぐるあたりにやあらん、河の水はいたく痩せて、ほとりの麥畑空しく赤らみたり。

日はくれぬ雨はふりきぬ旅衣袂かたしきいづくにか寢ん

次の日雨晴る。路に立てる芭蕉塚に興を催してたどり行けば、行手遙かに山重れり。野の狹う尖りて、次第々々に入る山路けはしく、弱足に登る馬場峠、さても苦しやと休む足下に、誰が栽ゑしか、珊瑚なすくさいちご、旅人も採らねばやこぼる

るばかりなり。少し登りて、とある樹蔭のよしず茶屋に憩へば主婦のもてなしぶり、谷水を四五町の麓に汲みてもてくる汗の滴り、情を汲む一口にうき世の腸は洗はれたり。一樹の蔭一河の流とや、ひじりの教も時にあうてこそ有難けれ。

一樹の蔭
一樹ノ下ニ宿リ一河ノ流ヲ汲ム（説門法眼論）

この夜は亂橋といふ怪しの小村に足をとゞむ。隣室の雜談に夢覺まされて、つとめてこゝを立出づれば、はや爪先あがりの立峠。旅の若衆と見て取つて、馬子が馬に乘れとのすゝめ。有難や乘りて見れば、旅ほど氣樂なるものはなし。昨日の馬場峠はなぜに苦しみし。路の邊に咲く白き花を何ぞと問へば「これなんうつぎと申す」といふ。いとうれしくて、

むら消えし山の白雪來て見れば駒のあがきに
ゆらぐ卯の花

峠にて馬を下る。鶯の時ならぬ音に驚かされて、

鶯や野を見おろせば早苗とり

松本にて晝餉したゝむ。早く木曾路に入らんことのみ急がれて、原新田まで三里の道を馬車にちゞめて洗馬までたどりつき、饅頭にすき腹を肥して、本山の玉木屋に宿る。

本山を出で櫻澤を過ぐれば、こゝぞ木曾の山入、山のけしき、水の有樣、はや尋常ならぬけはひにうつゝをぬかし、桃源遠からずと獨り勇めば、鳥の聲も耳にたちて珍し。

奈良井の茶屋に憩ひて「ぐみはなきか」と問へば「ぐみといふものは知りはべらず。珊瑚實ならば背戸にあり」といふ。山中に珊瑚、さてもいぶかしと裏に廻れば、ぐみなり。あるじの女房親切に採りてくれたり。峽中第一の難所といふ鳥居峠

は、若葉の風に夢を薫らせて、痩馬の力におもしろう攀登る。

馬の背や風吹きこぼす椎の花

頂にて馬を下り、つく〳〵四方を見おろせば、古木鬱蒼、谷深くして、樵夫の小徑微かに隱見す。珍しく晴れわたりたる空の青嵐を踏まへながら山を下れば、藪原の驛なり。或家に立寄りてお六櫛を求む。このほとりよりぞ木曾川に沿うて下るなる。白雲をあやどる山脈は愈迫りて、かぶせかゝらん勢怖しく、奥山の雪を解かして清らかなる水は谷を縫うて、その響凄じ。深き淵のたゞ中に、大いなる岩の一つ突出でたる上に、年ふりたる松の枝おもしろく、龍にやあらんと思はれたるもをかし。宮越の村はづれにたゝずむほどに、いと古代めきたる翁の釣竿を擔ぎたるが、畫の中よりぞ現れ出でたる。笠

旭將軍　木曾義仲
昔の城　宮越城址　義仲の本城
宣公　義仲の法名

をぬぎて慇懃に德音寺への道を問ふ。翁のいふ、さても優しの若者や。旭將軍のなき跡を弔はんとてや、こゝまでは來給へる。こゝに茂れる夏木立は八幡の御社なり。かしこの山の上こそ昔の城の址なれ。このわたりの畑も、つはものどもの住みし夢の名殘なるものを、今は桑の木ばかりぞ秀でたる」。と、一つ〳〵に指さす。そゞろに古しのぶ言葉のはし、この翁、謠ならばかき消すやうに失せぬべし。日照山德音寺に行きて、木曾宣公の碑の石摺一枚を求む。この前の淵を山吹が淵巴が淵と名づくとかや。福島を今宵の旅枕と定む。木曾第一の繁昌なりとぞ。

翌日朝大雨。待てども晴間なし。傘を購ひ來りて書流す句に、

棧 福島と上松との間

狩野派 狩野正信を祖とする畫派

土佐派 平安朝初期になつた畫派

をりからの木曾の旅路を五月雨

旅亭を出づれば、雨小やみになりぬ。このひまにと急げば、雨の脚に追ひつかれ、木蔭に憩へば、また降りやむ。とにかくと雨になぶられながら、行き〳〵て棧に著きたり。見る目危き兩岸の岩の、數十丈の高さに削りなしたるさま、一雙の屏風を押立てたるが如し。神代の昔よりむし重りたる苔の、美しう青みわたれるあはひ〳〵に、何げなく咲出でたる杜鵑花の麗しさ。狩野派にやあらん、土佐派にやあらん。下をのぞけば、五月雨に水かさ増したる川の勢、渦まく波に雲を流して、突きては割れ、當りては碎くる響、大磐も動く心地して、うしろの茶屋に入り、床几に腰うちかけて目を瞑ぐに、大地の動しばしはやまず。

蕉翁 松尾芭蕉

石碑 「かけはしや命をからむつたかづら」の句碑

蕉翁の石碑を拜みて、さゝやかなる橋の虹の如き上を渡るに、わが身も空中に浮かぶかと疑はれ、足の裏ひやと覺えて、強くもえ踏まず。

木曾の棧の圖

通り來し方を見わたせば、こゝぞ棧のあとと思しきも、今は石を積固めたれば、もとより往來の煩もなく、たゞつたかづらの力がましくはひまつはれるばかりぞ、古の面影なるべき。

昔たれ雲のゆききの跡つけてわたしそめけん

木曾の棧

上松を過ぐれば、ほどもなく寢覺の里なり。寺に至りて案内を乞へば、小僧絶壁のきりぎはに立ち、遙かの上を指さして、「こゝは浦島太郎が龍宮より歸りて後に、釣を垂れし跡なり。川のたゞ中に松の生ひたる大岩を寢覺の床岩、その上の祠を浦島堂とは申すなり。その傍に押立てたる岩を屏風岩、疊み上げたるを疊岩といふ。象岩はその鼻長く、獅子岩はその口廣し。この外、腰掛岩・まないた岩・釜岩・硯岩・烏帽子岩など申すなり。」と、いと殊勝氣にぞしやべりける。

誠やこゝは天然の庭園にて、松青く、水淸く、いづこの工匠か削り成しけん、岩石は峨々として高く低く、或は凹みて渦をなし、或は逼りて瀧をなす。いかさま仙人の住所とも覺えてたふとし。

（獺祭書屋俳話）

長柄堤
現大阪市東淀川區中津川の堤

坪内逍遙
名は雄藏
英文學者
文學博士
昭和十年歿

片桐市正且元
秀頼の傅
二二七五年歿

茨木
現大阪府三島郡茨木町

七 長柄堤の訣別

坪内逍遙

晨鷄再び鳴いて殘月うすく、征馬しきりに嘶いて行人出づ。はや分かれゆく横雲や、殘んの星を一つづつ鐘が消しゆくいなのめの長柄堤に秋闌けて、一村蘆に風黑く、有明凄き大川水、逝きて歸らぬ浪の音、狹霧に咽び白けゆく千草が蔭の蟲の聲、哀はいとどまさるらん。片桐市正且元は居城茨木へ立退かんと、從ふ郎黨一百餘人、寅の刻に邸を立つて、大阪城をあとになし、列を正してしづ〳〵と長柄堤に差懸る。

後には何か一思案、寂然として駒立つる長柄堤の有明方、塒に囀る小鳥の聲、川霧やう〳〵晴れゆけば、遠樹模糊として幹を分かち、ほの見え渡る賤が屋に、一筋のぼる朝煙、くたかけの聲勇ましく、生氣溢るゝ東の空には似ぬや入る方の、月すさまじき柳蔭、枯

南山不落
南山ノ壽ノ如ク騫アズ崩レズ（詩經）

加藤肥州
加藤清正

大政所
豊臣秀吉の夫人清野氏

唇齒已に
輔車相依り唇亡ビテ齒寒シ（左傳）

葉枝疎らにして風颯々、見る目も昏し、をち方におぼろ〳〵と現るゝ、名におほ阪の四衢八街、悄然として寂しげに一棟高く聳えしは、

片桐　おゝ、あれこそはお天守ぢやなあ。南山不落と祝はせられ、千萬年の後までもと築かせられし大阪城、故殿下かくれさせ給ひて後、まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れ離れ、取りわけ加藤肥州逝去の後は、思慮ある者には堅節なく、義勇を存ずる者才略乏しく、阿附黨同して相鬩げば、大政所の御方さへ當家を餘所にみそなはし、浮世離れし御有樣。唇齒已に亡ぶ。今にもあれ、事起らば、金城湯池も其の甲斐なく、

いひかけて聲曇らせ、

千姫君
秀頼の室
徳川秀忠の女

前門の虎
前門ニ虎ヲ拒イデ後門ニ狼ヲ進ム（故事瓊林）

須彌より重き御遺命、夢聊かも忘れざれど、御運の末か、情なや、此の且元がすること爲すこと、いすかの嘴とくひちがひ、兩家を繋ぐ絆にもと、迎へ奉りし千姫君は、東西不和の導火となり、毘盧舍那佛の御胸にも、大慈大悲は宿らざるか。「御家長へに康かれ」と祝ひし文字が本となり、降つて涌いたる難題は、たゞ前門の虎にして、後に不慮の豺狼あり。かゝる仕儀となつたること御運の末といひながら、

こらへず馬よりとび下り、彼方に向かひ平伏なし、

これしかしながら、不肖且元愚昧にして先見なく、姑息因循して大事を誤り、空しく關東の罠にかゝり、仰せつけられし御遺命に背き奉る今日の仕合はせ、不忠とも、言ふ甲斐なしとも思し召さん。それを思へば、且元が此の腸はちぎる

るばかり、償ひ難き不臣の罪はあの世で御詫び仕らん。御救しなされて下さりませ。

在すが如く兩手をつき、人目なければ、やゝしばし、不覺の涙に暮れけるが、やゝあつて心づき、

あゝ我ながら不覺の至。我が大罪の御詫よりも、差懸るお家の安危。長門守には如何にせし。心許なき事どもぢやなあ。

すかしながむる折こそあれ、遙かに聞ゆる蹄の音。程もあらせず唯一騎、殘霧つんざき一散に、汗馬に宙を走り來る木村長門守重成、

木村　市正殿に候な。

片桐　長門どの、待ちかねしぞ。

長門守
木村重成
秀頼の臣
二二七五年戰死

長柄堤舞臺面圖

いふ間にかけ寄るくつわづら、右手におり立ち顔見合せ、言葉はなくてそゞろにも、まづ袖濡るゝ朝露や、風飄々たる枯柳の枝、入りがたの月ゆらめきて、老いゆく秋のさびしさを長柄堤にとゞむらん。

木村　最早豐臣の御社稷も、いよいよ末となつたるか。棟梁と賴む貴殿まで、佞人讒者の毒舌に逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるるとは。某圖らぬ事よりして、端なくも御母公の御嫌疑蒙り、出仕

織田入道
織田信雄
常眞入道
御母公
淀君
大野
大野治長
淀君の寵臣
渡邊
渡邊内藏介糺
淀君の寵臣

を遠慮の其の間に思ひ懸けぬ珍變あり。續いて貴殿に御討手と昨朝承り、大いに驚き、すぐに御表へ參入すれば、城内議論沸くが如く、織田入道殿、日頃に似げなく激論の末、席を蹴立て、たゞ今退座ありしとばかり。後は亂脈無法の評定、御母公の威を笠に被る大野・渡邊等が我意暴慢。此の上は是非に及ばず、彼等を一刀に斬つて捨て、腹かつ切らんと、二度まで刀の柄に手は懸けしが、貴殿が日頃の教訓を思ひ出して無念を忍び、無實と知つて忠臣を救ひ得ざりし言ふ甲斐なさ。

悔むを且元押宥め、

片桐　いしくも堪忍せられしぞや。豫ても屢、申しし如く、お家の大仇は彼等にあらず。鼠輩の爲に命を落すは大忠臣の所爲にあらじ。某とても此の度の一條、遺恨骨に徹すと雖も、今更繰返すは愚痴の至。大切なるはお家の後事。某退去の事關東に聞えなば、破綻生ぜん事治定なるに、昨日までは去就を定めざりし織田殿已に心を變じ、京表へ退身せられしからは、城内の祕密悉く漏れ、年來の苦心皆うたかた。大亂破裂せんは目前なり。此の上はたゞ偏に籠城の計畫こそ肝要なれ。

木村　して籠城の計畫とは、何を以て先とすべきか。

片桐　されば、今御城に、兵糧・金銀は乏しからず、まつた猛將勇卒にも事かゝねど、得難きは智謀の將なり。某これを慮り、萬一の備をなし置きたり。

木村　して其の智謀の將とは。

九度山 現和歌山縣伊都郡の山村
眞田安房守 名は昌幸 二二五八年歿
幸村 二二七五年戰死
長曾我部盛親 大阪方勇將 二二七五年歿
後藤又兵衛基次 二二七五年戰死

片桐　今、九度山に隱れ忍ぶ信州上田前の城主眞田安房守が二男左衛門佐幸村こそ、故太閤の恩を思ふ智勇兼備の良軍師、關ヶ原の一戰以來關東の跋扈を怒り、蟄して世の樣を窺へるを先年御味方となし置いたり。事起らば上使を以て急ぎ彼を招かるべし。合戰の進退は一切彼の人に任せられよ。其の他關ヶ原の一亂以後浪々なしし長曾我部盛親、まつた黑田家の浪人後藤又兵衛基次、いづれも得易からぬ良將なるが、豫て因みは附置きたり。上、御使を以て招かせられなば、心を傾け馳參ぜん。これ、第一の手配りなり。

木村　してまた籠城となつたる曉、敵を防がん手配りは。

片桐　其の儀も豫て地利を考へ、出丸なくては叶ふまじと、前年紀州の山々より材木數多伐出させ、商業の爲と詐り、紀州

川の川上より浪華津に押流させ、御船入りに積置いたり。まつた港口の御庫には、年頃力めて購ひ置きたる數萬俵の糧米あり。籠城數年に亙るとも、なほ支ふるに餘りあるべし。

木村　それに加へて、故殿下が貯へ置かれし數萬の金銀、近年御入りめ嵩むと雖も、尙そこばくの餘財あり。

片桐　甲冑・兵具も乏しからず。

木村　城は名に負ふ南山不落。

片桐　眞田・後藤の智勇をもつて、此の堅城に立籠り、忠臣悉く心を一にし、偏に君家を守護するときんば、

木村　たとひ關東の老奸雄、利を啗はせ、諸大名を懷け、六十餘州の兵を盡くし、四方八面より攻めよすとも、

速水
名は守久
御宿
名は正倫
和久
名は宗是

片桐　なか〳〵三年四年が程には攻落さん事難かるべし。

木村　まつた若年には候へども、愈軍始りなば、我亦一方を承り、速水・御宿・和久等と共に忠義を金鐵の堅きに比し、命はもとより鴻毛の吹飜さん白旗は、祖先佐々木が四つ目結、君臣・將士心を一にし、千變萬化の手を盡くさば、金石も亦透りぬべし。利欲に集る關東勢、なに退くるに難かるべきや。此の上は仰に從ひ、此の事君に言上なし、直ちに軍の手配りせん。御心安かれ、市正殿。

片桐　ほゝ頼もしし〳〵。たゞ大切は上下の一致、必ず忠勤勵まれよ。とはいひながら、往時に照し、なりゆく末をかんがみれば、

木村　淀の御方の御氣質、社鼠に等しき大野・渡邊。

地の利
天ノ時ハ地ノ利ニ如カズ
地ノ利ハ人ノ和ニ如カズ
（孟子）

大御所
德川家康

片桐　上御發明に渡らせらるれど、

木村　讒佞これを蔽ふが故、

片桐　地の利はあれども人の和なく、

木村　故太閤が御威武に、をのゝき震ひ打伏せし六十餘州の民草も、

片桐　天の時にや、大御所のおのづからなる德風に、いつしか靡く世の有樣。

木村　如何なればかくまでに、御運かたぶく西天の、

片桐　有明の影薄れつゝ、

木村　東天紅と八面に、かしましく鳴くくたかけは、

片桐　新日、東天に昇るといふ、

木村　世の成行の、

二人　影なるか。

是非もなき世の有様と、入る方の月詠め入り、しばしは愚痴にお
ち方寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほの〴〵と明けにけり。片桐市正
面を正し

片桐　萬一にも其の期に至り、百計合期せずば、それまでなり。
當來を誰かは知らん。殪れて後已まんのみ。大丈夫豈徒
に杞憂すべしや。後事を貴殿に託せし上は、もはや思ひ殘
す事もなし。

木村　して貴殿はこれよりして、

片桐　居城茨城へ一まづ立越え、

木村　と言はるゝは受取り難し。若しやこれが今生の、

片桐　あゝいや、いさぎよき最期をだに遂ぐべき機會を失ひ

し市正が命の拙さ、此の身ひとつを兎や角と、千筋に迷ふ心
の中。いやなに、心ばかりは此の後とても、君の御影に附添
ひ參らせ、萬一にも杞憂的中なし、大事去りなん其の時には、

木村　某とても事破れて、御運の末となる時は、此の世の思出、
奉公をさめ、關東勢が眞中に、縱横無盡の血戰なし、花々しく
討死なさん。

片桐　おゝ、勇ましし、いさぎよし。某ながらへ世にあらば、其
の目ざましき働をば、餘所ながら見物なさん。なほ再會は
あの世にて。まづそれまでは長門殿。

木村　さやうござらば市正殿、

片桐　隨分堅固で、

木村　そこもとにも、

惜しきが中に生別離、まことやこれにくらぶれば、黄檗は蜜にや似たるらん。右と左に立ちわかれ、駒引寄せて式退や。秋さび月も乗る人の、心やいかに白駒の、勇むを制するかた手綱、引もどさるゝうしろ髪。

二人　さらば〳〵。

と西東、見送る方に霧や立つ、眼や曇る、おぼろ〳〵。嘶く駒の聲はして、立別れゆく兩人が此の世に殘す面影は、また見ぬ形とぞなりにける。

（桐一葉）

國木田獨歩
名は哲夫
小説家
明治四十一年
歿

逗子
神奈川縣三浦郡
御最後川
逗子町

六代御前
維盛の男

焚火

國木田獨歩

北風を背になし、枯草白き砂山の崖に腰かけ、足なげいだして、伊豆連山の彼方に沈む夕日の薄き光を見送りつゝ沖より歸る父の舟遲しと待つ逗子邊の童の心、その淋しさ、うら悲しさは如何あるべき。御最後川の岸邊に茂る葦の枯れて、吹く潮風に騒ぐその根かたには、夜半の滿潮に人知れず結びし氷、朝の退潮に破られて殘り、ひねもす解けもえせず、夕闇に白き線を水際に引く。若し旅人、疲れし足をこのほとりに停めし時、何心なく見廻して、何等の感もなくゆき過ぎ得べきか。見かへれば彼處なるは哀を今も、七百年の後にひく六代御前の杜なり。木がらしその梢に鳴りつ。

落葉を浮かべて、ゆるやかに流るゝこの沼川を、漕上る舟、知らず何れの時か心地よき追分の節面白くこの舟より響き渡りて霜夜の前ぶれをかなしつる。あらず、あらず、たゞ見る何時も何時も、物言はぬ、笑はざる歌はざるをのこの、農夫とも漁夫とも見分け難きが淋しげに艪あやつるのみ。

鍬かたげし農夫の影の、橋と共におぼろにこれに映る、かの舟、音もなく、これを搔亂しゆく、見る間に、舟は葦がくれ去るなり。

日影なほあぶずりの端にたゆたふ頃、川口の淺瀨を村の若者二人、はだか馬に跨りて靜かに歩ます畫めきたるを見ることもあり。かゝる時濱には見わたす限り、人らしきものの影なく、ひき上げし舟の舳に止れる烏の、聲も立てで翼打ちもの

うげに鎌倉の方さして飛びゆく。

或年の十二月末つ方、年は迫れども童は何時も氣樂なる風の子、十三歳を頭に、九つまで位が七八人、砂山の麓に集りて何事をか評議まち〳〵、立てるもあり、砂に肱を埋めて頰杖つけるもあり、坐れるもあり。この時、日は西に入りぬ。

評議のこと定まりけん、童等は思ひ〳〵に波打際を駈けめぐりはじめぬ。入江の端より端へと、おのがじし、見るが間に分かれ散れり。潮遠く引去りしあとに殘るは朽ちたる板、緣缺けたる椀、竹の片、木の片、柄の折れし柄杓などの色々、皆一昨日の夜の荒の名殘なるべし。童等は一々これらを拾ひ集めぬ。集めてこれを水際を去る程よき處、乾けり砂を選びて積みたり。つみし物は悉く濡ひ居たり。

小坪
鎌倉市の東部

この寒き夕まぐれ、童等は何事を始めたるぞ。日の西に入りてより程經たり。箱根・足柄の上を包むと見えし雲は黄金色にそまりぬ。小坪の浦に歸る漁船の、風落ち陸近ければにや帆を下し漕ぎゆくもあり。

がらす碎け失せし鏡の、額縁めきたるを拾ひて、これを燒くは惜しき心地すといふ兒の丸顔、色黑けれど愛らし。されどそは必ず能く燃ゆと、この群の年かさなる子、己が力に餘る程の太き丸太を置きつゝいへり。その丸太は燃えじと丸顔の子いふ。いな燃さで置くべきと年上の子いきまきて立ちぬ。傍に一人、今日は獲物の何時になく多きやうなりと、喜ばしげに叫びぬ。

童等の願はこれらの獲物を燃さんことなり。赤き炎は彼

等の狂喜なり。走りてこれを躍り越えんことは互の誇なり。されば彼等このたびは砂山の彼方より、枯草の類を集め來りぬ。年上の子、先に立ちてこれらに火をうつせば、童等は丸く火を取りまきて立ち、竹の節の破るゝ音を今か〳〵と待てり。されど燃ゆるは枯草のみ。燃えて消えぬ。煙のみ徒にたちのぼりて木にも竹にも火は容易く燃えつかず。鏡の枠は僅かに焦げ、丸太の端より、怪しげなる音して湯氣を吹けり。童等は交る〳〵砂に頭押しつけ、口を尖らして吹けど生憎に煙眼に入りて皆の顔は泣きたらん如し。

沖は早や暗うなれり。江の島の影も見わけ難くなりぬ。干潟を鳴きつれて飛ぶ千鳥の聲のみ聞えて、彼方此方、ものさびしく、その姿見えずと見れば、夕闇に白きものはそれなり。

あわたゞしく飛びゆく鳴、かの葦間よりや立ちけん。

この時、一人の童忽ち叫びていひけるは、見よや、見よや、伊豆の山の火はや見えそめたり。如何なればわれらが火は燃えざるぞと。童等は齊しく立上りて、沖の方を打ちまもりぬ。げに相模灣を隔てて、一點二點の火、鬼火かと怪しまるゝばかり、明滅し、動搖せり。これ正しく伊豆の山人、野火を放ちしなり。冬の旅人の日暮れて途遠きを思ふ時、遙かに望みて泣くは實にこの火なり。

伊豆の山燃ゆ、伊豆の山燃ゆと、童等節面白く唄ひ、沖の方のみ見やりて手を拍ち、躍り狂へり。あはれこの罪なき聲、かはたれ時の淋しき濱に響きわたりぬ。さゝやく如き波音、入江の南の端より白き線立て、走り來り、これに和したり。潮は滿

ちそめぬ。

この寒き日暮に何時までか濱に遊ぶぞと呼ぶ聲、砂山の彼方より聞えぬ。童の心は伊豆の火の方にのみ馳せて、この聲を聞くもの無かりき。

歸らずや、歸らずやと二聲三聲、引續きて聞えけるに、一人の幼き兒、聞きつけて、母呼び給へり、最早打捨て歸らんといひ、忽ち彼方に走りゆけば、殘りの童等また、さなり、さなりと叫びつつ、競うて砂山に駈けのぼりぬ。

火の燃えつかざるを口惜く思ひ、かの年かさなる童のみは、後振りかへりつゝ馳せゆきけるが、砂山の頂に立ちて、將に彼方に走り下らんとする時、今ひとたび振向きぬ。ちらと眼を射たるは火なり。こは如何に、われらの火燃えつきぬと叫べ

ば、童等は驚き怪しみ、立返りて砂山の頂に集り、一列に竝びて此方を見下しぬ。

げに今まで燃えつかざりし拾木の、忽ち風に誘はれて火を起し、濃き煙うづまき上り、紅の炎の舌見えつ隱れつす。竹の節の破るゝ音聞え、火の子舞立ちぬ。火は正しく燃えつきたり。されど童等は最早やこの火に還ることをせず、たゞ喜ばしげに手を拍ち、高く歡聲を放ちて、一齊に砂山の麓なる家路の方へ馳下りけり。

今は海暮れ、濱も暮れぬ。冬の淋しき夜となりぬ。この淋しき逗子の濱に、主なき火はさびしく燃えつ。

忽ち見る、水際をたどりて、火の方へと近づき來る黑き影あり。こは年老いたる旅人なり。彼は今しも御最後川を渡り

て濱に出で、濱づたひに小坪街道へと志しぬるなり。火を目がけて小走に歩むその足重し。

嗄れし聲にて、よき火やと幽かに叫びつ。杖なげ捨てていそがしく背の小包を下し、兩の手を先づ炎の上にかざしぬ。その手は震ひ、その膝はわなゝきたり。げに寒き夜かな、いふ齒の根も合はぬが如し。炎は赤くその顏を照らしぬ。皺の深さよ。眼いたく凹み、その光は濁りて鈍し。

頭髮も髯も胡麻白にて塵にまみれ、鼻の先のみ赤く、頰は土色せり。あはれ、何處の誰ぞや。指してゆく先は何處ぞ。ゆく方定めぬ旅なるかも。

げに寒き夜かな。獨りごちし時、總身を心ありげに震ひぬ。斯くて溫まりし掌もて心地よげに顏を摩りたり。いたく古

びて所々古綿の現れし衣の、火に近き裾のあたりより湯氣を放つは、朝の雨に霑ひて、なほ乾すことだに得ざりしなるべし。

あな心地よき火や。いひつゝ投げやりし杖を拾ひて、これを力に片足を揚げ火の上にかざしぬ。脚絆も足袋も、紺の色あせ、のみならず血色なき小指現れぬ。一聲高く竹の裂るゝ音して、勢よく燃上りし炎は足を焦がさんとす。されど翁は足を引かざりき。

げに心地よき火や。誰が燃やしつる火ぞ。忝し。いひさして足を替へつ。十とせの昔、樂しき爐見捨てぬるよりこのかた未だこのやうなるうれしき火に遇はざりき。いひつゝ火の奥を見つむるまなざしは遠きものを眺むるが如し。火の奥には過ぎし昔の爐の火、昔のまゝに描かれやしつらん。

鮮かに現るゝものは兒にや孫にや。昔の火は樂しく、今の火は悲し。あらず、あらず、昔は昔、今は今、心地よきこの火や。いふ聲は震ひぬ。荒々しく杖を投げやりつ。火を背になし、沖の方を前にして立ち、體をそらせ、兩の拳もて腰をたゝきたり。仰ぎ見る大空、晴れに晴れて、黑澄み、星河霜をつゝみて、遠く伊豆の岬角に垂れたり。

身うち暖かくなりまさりゆき、ひぢたる衣の裾も袖も乾きぬ。あゝこの火、誰が燃やしつる火ぞ。誰が爲にとて、誰が燃やしつるぞ。今や翁の心は感謝の情にみたされつ。老の眼は涙ぐみたり。風なく、波なく、さし來る潮の、しみ〴〵と砂を浸す音を翁は眼閉ぢて聽きぬ。さすらふ旅の憂もこの刹那忘れはてけん。翁が心、いま一たび童の昔にかへりぬ。

あはれこの火、漸うに消えなんとす。竹も燃盡き、板も燃盡きぬ。かの太き丸太のみはなほよく燃えたり。されど翁はもはやこれを惜しとも思はざりき。たゞ立去際に名殘惜しくてや、兩手もて輪をつくり、抱くやうに胸のあたりまで火の上にかざしつ。眼しばたゝきてありしが、いざとばかり腰うちのばし、二足三足ゆかんとして立返れり。燃殘りたる木の端々を搔集めて火に加へつ。勢よく燃上るを見て心地よげに打笑みぬ。

翁のゆきし後、火は紅の火を放ちて、寂寞たる夜の闇のうちに覺束なく燃えたり。夜更け、潮みち、童等が焚きし火も、旅の翁が足跡も永への波に消されぬ。

（獨歩全集）

夏目漱石
名は金之助
英文學者
小說家
大正五年歿

九 山路

夏目漱石

山路を登りながら、かう考へた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、心安いところへ引越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生まれ、畫が出來る。

人の世を作つたものは、神でもなければ鬼でもない。やはり向かふ三軒兩隣にちら〳〵する唯の人間である。唯の人の世が住みにくいからとて、越す國はあるまい。あれば人でなしの國へ行くばかりだ。人でなしの國は、人の世よりもな

ほ住みにくからう。

越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくいところをどれ程か寛げて、束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出來、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は、人の世を長閑にし、人の心を豐かにするが故に尊い。

住みにくい世から住みにくい煩ひを引拔いて、有難い世界をまのあたりに寫すのが詩である畫である。或は音樂・彫刻である。こまかにいへば、寫さないでもよい。唯まのあたりに見れば、そこに詩も生き歌も涌く。著想を紙に落さずとも瓏鏘の音は胸裏に起る。丹青を畫架に向かつて塗抹せずとも、五彩の絢爛は自ら心眼に映る。たゞ己が住む世をかく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに、澆季溷濁の俗界を清くうらゝかに收め得れば足る。この故に、無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縑なきも、かく人生を觀じ得る點に於て、かく煩惱を解脱し得る點に於て、かく清淨界に出入し得る點に於て、又この不同不二の乾坤を建立し得る點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩し得る點に於て、千金の子よりも、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知つた。

二十五年にして、明暗は表裏の如く、日のあたるところにはきつと影がさすと悟つた。三十の今日はかう思うてゐる、喜びの深き時、憂愈深く、樂しみの大いなる程、苦しみも大きい。これを切放さうとすると、身が持てぬ。かたづけようとすれ

ば、世が立たぬ……。

余の考がこゝまで漂流して來た時、余の右足は突然坐りのわるい角石の端をふみ損つた。平衡を保つために、すはやと前に出した左足が、仕損じの埋合はせをするとともに余の腰は具合よく方三尺程な岩の上におりた。肩に掛けた繪の具箱が腋の下から躍り出しただけで、幸に何のこともなかつた。

立上る時に向かふを見ると、路から左の方に、バケツを伏せたやうな峯が聳えてゐる。杉か檜か分からないが、根元から頂まで悉く蒼黑い中に、山櫻が薄赤くだんだらに棚引いて、つづき目がしかと見えぬ位靄が濃い。少し手前に禿山が一つ、群を擺んでて眉に逼る。禿げた側面は巨人の斧で削り去つたか、鋭き平面をやけに谷の底に埋めてゐる。天邊に一本見

えるのは赤松だらう。枝の間の空さへはつきりしてゐる。行手は二町程で切れてゐるが、高いところから赤い毛布が動いて來るのを見ると、登ればあすこへ出るのだらう。路は頗る難儀だ。もとより急ぐ旅でないから、ぶら〳〵と七曲りへかゝる。

雲雀

忽ち足の下で雲雀の聲がし出した。谷を見下したが、どこで鳴いてゐるのか影も形も見えぬ。唯聲だけが明らかに聞える。せつせと忙しく絶間なく鳴いてゐる。方幾里の空氣が一面に蚤に刺されてゐたゝまらない

やうな氣がする。あの鳥の鳴く音には、瞬時の餘裕もない。長閑な春の日を、鳴盡くし、鳴明し、又鳴暮さなければ氣が濟まぬと見える。その上、どこまでも昇つて行く、いつまでも昇つて行く。雲雀はきつと雲の中で死ぬに相違ない。昇りつめた揚句は、流れて雲に入つて、漂うてゐるうちに、形は消えてなくなつて、唯聲だけが空の裡に殘るのかも知れない。

巖角は鋭く廻つて、按摩なら眞逆さまに落ちるところを、際どく右へ切れて横に見下すと、菜の花が一面に見える。雲雀はあすこへ落ちるのかと思つた。いゝや、あの黄金の原から飛揚つて來るのかと思つた。次には落ちる雲雀と揚る雲雀が十文字にすれ違ふのかと思つた。最後に、落ちる時にも、揚る時にも、又、十文字にすれ違ふ時にも、元氣よく鳴き續けるだ

らうと思つた。

春は眠くなる。猫は鼠を捕ることを忘れ、人間は借金のあることを忘れる。時には自分の魂の居處さへ忘れて、正體なくなる。唯菜の花を遠く望んだ時に眼が覺める。雲雀の聲を聞いた時に魂のありかが判然する。雲雀の鳴くのは、口で鳴くのではない、魂全體で鳴くのだ。魂の活動が聲に現れたもののうちで、あれ程元氣のあるものはない。あゝ、愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。

忽ちシェレーの雲雀の詩を思ひ出して、口の中で諳誦してみたが、覺えてゐるところは二三句しかなかつた。その二三句の中にこんなのがある。

前を見ては、後へを見ては、物欲しと憧るゝかな、

シェレー
英國の詩人

われ。
腹からの笑といへど、苦しみのそこにあるべし。
美しき極みの歌に、悲しさの極みのおもひ、籠る
とぞ知る。

成程いくら詩人が幸福でも、あの雲雀のやうに思ひ切つて、一心不亂に、前後を忘却して、わが喜びを歌ふわけには行くまい。西洋の詩は無論のこと、支那の詩にも、よく萬斛の愁などといふ字がある。詩人だから萬斛で、素人なら一合で濟むかも知れぬ。してみると詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に神經が鋭敏なのかも知れぬ。超俗の喜びもあらうが、無量の悲しみも多からう。そんなら詩人になるのも考へものだ。

暫くは路が平で、右は雜木山、左は菜の花の見續けである。足の下に時々蒲公英を踏みつける。鋸のやうな葉が遠慮なく四方へのして、眞中に黃色な珠を擁護してゐる。菜の花に氣をとられて、踏みつけた後で、氣の毒なことをしたと振向いて見ると、黃色な珠は依然として鋸の中に鎭座してゐる。暢氣なものだ。また、考を續ける。

詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば、微塵の苦しみもない。菜の花を見ても、唯嬉しくて胸が踊るばかりだ。蒲公英もその通り、櫻も——櫻はいつか見えなくなつた。かう山の中へ來て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白いだけで別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば足が草臥れて、旨いものが食べられ

ぬ位のことだらう。

併し、苦しみのないのは何故だらう。唯この景色を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面を貫つて開拓する氣にもならねば、鐵道をかけて一儲する料簡も起らぬ。唯この景色が――腹の足しにもならぬ、月給の補にもならぬこの景色が、景色としてのみ余の心を樂しませつゝあるから、苦勞も心配も伴なはぬのだらう。自然の力はこゝに於て尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇乎として醇なる詩境に入らしめるのは自然である。

苦しんだり、怒つたり、驕いだり、泣いたりは、人の世につきものだ。余も三十年の間それを仕通して、飽き〳〵した。飽き飽きした上に、芝居や小説で同じ刺戟を繰返しては大變だ。

余が欲する詩は、そんな世間的の人情を鼓舞するやうなものではない。俗念を放棄して、暫くでも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも、人情を離れた芝居はない。理非を絶した小説は少からう。どこまでも世間を出ることが出來ぬのが彼等の特色である。殊に西洋の詩になると、人事が根本になるから、所謂詩歌の純粹なるものも、この境を解脱することを知らぬ。どこまでも同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるものだけで用を辨じてゐる。いくら詩的になつても、地面の上を駈歩いて、錢の勘定を忘れるひまがない。シェレーが雲雀を聞いて歎息したのも無理はない。

嬉しいことに、東洋の詩歌にはそこを解脱したのがある。

採菊東籬下（陶淵明）

獨座幽篁裏（王維）

採菊東籬下。悠然見南山。

陶淵明圖

唯それぎりの裏に、暑苦しい世の中をまるで忘れた光景が出てくる。垣の向かふに隣の人が覗いてゐるわけでもなければ、南山に親友が奉職してゐる次第でもない。超然と出世間的に、利害損得の汗を流し去つた心持になれる。

獨坐幽篁裏。彈琴復長嘯。深林人不知。明月來相照。

唯二十字のうちに、優に別乾坤を建立してゐる。

王維　唐の詩人　畫家

陶淵明　宋の詩人　皇紀一〇八七年歿

ファウスト　ゲーテの劇詩

ハムレット　シェークスピヤの戲曲

惜しいことに今の詩を作る人も、詩を讀む人も、皆西洋人にかぶれてゐるから、わざ〳〵暢氣な扁舟を浮かべてこの桃源に溯るものはないやうだ。余はもとより詩人を職業にして居らんから、王維や陶淵明の境界を今の世に布敎して廣げようといふ心掛も何もない。唯自分にはかういふ感興が、演藝會よりも、舞踏會よりも藥になるやうに思はれる。ファウストよりも、ハムレットよりも有難く考へられる。かうやつて唯一人、繪の具箱と三脚几とを擔いで、春の山路をのそ〳〵と歩くのも全くこれがためである。淵明・王維の詩境を直接に自然から吸收して、少しの間でも非人情の天地に逍遙したいからの願。一つの醉興だ。

（草枕）

森鷗外
名は林太郎
醫學博士
文學博士
大正十一年歿

高瀬川
賀茂川の分水
宇治川に入る

一〇 高瀬舟

森鷗外

高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。徳川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されると、本人の親類が牢屋敷へ呼出されて、そこで暇乞をすることを許された。それから罪人は高瀬舟に載せられて、大阪へ廻されるのであつた。それを護送するのは、京都町奉行の配下にゐる同心で、この同心は、罪人の親類の中で主立つた一人を、大阪まで同船させることを許す慣例であつた。これは上へ通つたことではないが、所謂大目に見るのであつた。默許であつた。

當時遠島を申し渡された罪人は、勿論重い科を犯したものと認められた人ではあるが、決して盜をするために、人を殺し、

火を放つたといふやうな獰惡な人物が多數を占めてゐたわけではない。高瀬舟に乘る罪人の過半は、所謂心得違のために想はぬ科を犯した人であつた。

さういふ罪人を載せて、入相の鐘の鳴る頃に漕出された高瀬舟は、黑ずんだ京都の町の家々を兩岸に見つゝ、東へ走つて、賀茂川を横ぎつて下るのであつた。この舟の中で、罪人とその親類の者とは、夜どほし身の上を語り合ふ。いつも〳〵悔んでも還らぬ繰言である。護送の役をする同心は、傍でそれを聞いて、罪人を出した親戚・眷族の悲慘な境遇を細かに知ることが出來た。所詮、町奉行の白洲で表向の口供を聽いたり、役所の机の上で口書を讀んだりする役人の、夢にも窺ふことの出來ぬ境遇である。

同心を勤める人にも、いろ〳〵の性質があるから、この時唯うるさいと思つて、耳を掩ひたく思ふ冷淡な同心があるかと思へば、又しみ〴〵と人の哀を身に引受けて、役柄ゆゑ氣色には見せぬながら、無言のうちに私かに胸を痛める同心もあつた。場合によつて非常に悲慘な境遇に陷つた罪人とその親類とを、特に心弱い、涙脆い同心が宰領して行くことになると、その同心は不覺の涙を禁じ得ぬのであつた。

そこで高瀬舟の護送は、町奉行所の同心仲間で、不快な職務として嫌はれてゐた。

いつの頃であつたか、多分江戸で白河樂翁侯が政柄を執つてゐた寛政の頃ででもあつただらう。知恩院の櫻が入相の

鐘に散る春の夕に、これまで類のない珍しい罪人が高瀬舟に載せられた。

それは名を喜助といつて、三十歳ばかりになる、住所不定の男である。固より牢屋敷に呼出されるやうな親類はないので、舟にも唯一人で乘つた。

護送を命ぜられて、一しよに舟に乘込んだ羽田庄兵衛は、唯喜助が弟殺の罪人だといふことだけを聞いてゐた。さて牢屋敷から棧橋まで連れて來る間、この痩肉の、色の蒼白い喜助の樣子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬つて、何事につけても逆らはぬやうにしてゐる。しかも、それが罪人の間に往々見受けるやうな、溫順を裝つて權勢に媚びる態度ではない。

下京 現京都市三條通以南の舊稱

庄兵衛は不思議に思つた。そして舟に乘つてからも、單に役目の表で見張つてゐるばかりでなく、絶えず喜助の擧動に細かい注意をしてゐた。

その日は暮方から風が歇んで、空一面を蔽つた薄い雲が、月の輪郭をかすませ、やう〳〵近寄つて來る夏の溫さが、兩岸の土からも、川床の土からも、靄になつて立昇るかと思はれる夜であつた。下京の町を離れて、賀茂川を横ぎつた頃からは、あたりがひつそりとして、唯舳に割かれる水のさゝやきを聞くのみである。

夜舟で寢ることは、罪人にも許されてゐるのに、喜助は横にならうともせず、雲の濃淡に隨つて光の增したり減じたりする月を仰いで默つてゐる。その額は晴れやかで、目には微か

な輝きがある。

庄兵衛はまともには見てゐぬが、始終喜助の顏から目を離さずにゐる。そして不思議だ、不思議だと、心のうちで繰返してゐる。それは、喜助の顏が縱から見ても、横から見ても、いかにも樂しさうで、若し役人に對する氣兼がなかつたなら、口笛を吹始めるとか、鼻唄を歌ひ出すとかしさうに思はれたからである。

庄兵衛は心のうちに思つた。これまでこの高瀬舟の宰領をしたこと幾度だか知れない。しかし、載せて行く罪人は、いつも殆ど同じやうに、目も當てられぬ氣の毒な樣子をしてゐた。それにこの男はどうしたのだらう。遊山船にでも乘つたやうな顏をしてゐる。罪は弟を殺したのださうだが、よし

やその弟が惡い奴で、それをどんな行掛りになつて殺したにせよ、人の情として好い心持はせぬ筈である。この色の蒼い痩男が、その人の情といふものが全く缺けてゐるほどの世にも稀な惡人であらうか。どうもさうは思はれない。ひよつと氣でも狂つてゐるのではあるまいか。いや〳〵、それにしては何一つ辻褄の合はぬ言語や擧動がない。この男はどうしたのだらう。庄兵衞には、喜助の態度が考へれば考へるほど分からなくなるのである。

暫くして、庄兵衞は咏へ切れなくなつて呼掛けた。「喜助。お前何を思つてゐるのか。」

「はい。」といつてあたりを見廻した喜助は、何事をかお役人に見咎められたのではないかと氣遣ふらしく、居ずまひを直して、庄兵衞の氣色を窺つた。

庄兵衞は、自分が突然問を發した動機を明かして、役目を離れた應對を求めるいひわけをしなくてはならぬやうに感じた。そこで、かういつた。「いや、別にわけがあつて聞いたのではない。實はな、おれはさつきからお前の島へ往く心持が聞いて見たかつたのだ。おれはこれまでこの舟で大勢の人を島へ送つた。それは隨分いろ〳〵な身の上だつたが、どれもどれも島へ往くのを悲しがつて、見送りに來て一緒に舟に乘る親類の者と、夜どほし泣くに極つてゐた。それにお前の樣子を見れば、どうも島へ往くのを苦にしてはゐないやうだ。一體お前はどう思つてゐるのだい。」

喜助はにつこり笑つた。「御親切に仰しやつて下すつて、有

難うございます。なるほど島へ往くといふことは、外の人には悲しいことでございませう。その心持はわたくしにも思ひ遣つて見ることが出來ます。しかし、それは世間で樂をしてゐた人だからでございます。京都は結構な土地ではございますが、その結構な土地でこれまでわたくしのいたして參つたやうな苦しみは、どこへ參つてもなからうと存じます。お上のお慈悲で、命を助けて島へ遣つて下さいます。島はよしつらい處でも、鬼の栖む處ではございますまい。わたくしはこれまで、どこといつて自分のゐて好い處といふものがございませんでした。今度お上で島にゐろと仰しやつて下さいます。そのゐろと仰しやる處に落著いてゐることが出來ますのが、先づ何よりも有難いことでございます。それにわたくしはこんなにかよわい體ではございますが、つひぞ病氣をいたしたことはございませんから、島へ往つてから、どんなつらい仕事をしたつて、體を痛めるやうなことはあるまいと存じます。それから、今度島へお遣り下さるに附きまして、二百文の鳥目を戴きました。それをこゝに持つてをります。」

かういひかけて、喜助は胸に手を當てた。遠島を仰せ附けられる者には、鳥目二百文を遣はすといふのは當時の掟であつた。

喜助は語を繼いだ。「お恥づかしいことを申し上げなくてはなりませぬが、わたくしは今日まで二百文といふおあしを、かうして懷に入れて持つてゐたことはございませぬ。どこかで仕事にとり附きたいと思つて、仕事を尋ねて歩きまして、

それが見つかり次第、骨を惜しまずに働きました。そして貰つた錢は、いつも右から左へ人手に渡さなくてはなりませんだ。それも現金で物が買つて食べられる時は、わたくしの工面のよい時で、大抵は借りたものを返して、又後を借りたのでございます。それがお牢にはいつてからは、仕事をせずに食べさせて戴きます。わたくしはそればかりでも、お上に對して濟まないことをいたしてゐるやうでなりませぬ。それにお牢を出る時に、この二百文を戴きましたのでございます。かうして相變らず、お上の物を食べてゐて見ますれば、この二百文はわたくしが使はずに持つてゐることが出來ます。お上を自分の物にして持つてゐるといふことは、わたくしに取つては、これが始でございます。島へ往つて見ますまでは、

どんな仕事が出來るか分かりませんが、わたくしはこの二百文を、島でする仕事の元手にしようと樂しんでをります。」かういつて喜助は口を噤んだ。

庄兵衛は「うん、さうかい」とはいつたが、聞くこと毎に餘り意表に出たので、これも暫く何もいふことが出來ずに、考へ込んで默つてゐた。

庄兵衛はかれこれ初老に手のとゞく年になつてゐて、もう子供が四人ある。それに老母が生きてゐるので、家は七人暮しである。平生人には吝嗇といはれるほどの儉約な生活をしてゐて、衣類は、自分が役目のために著るものの外、寢卷しか拵へぬくらゐにしてゐる。しかし不幸なことには、妻を好い身代の商人の家から迎へた。そこで女房は夫のもらふ扶持

米で暮しを立てて行かうとする善意はあるが、裕かな家に可愛がられて育つた癖があるので、夫が滿足するほど手元を引締めて暮して行くことが出來ない。動もすれば月末になつて勘定が足りなくなる。すると女房が内證で里から金を持つて來て、帳尻を合はせる。それは夫が借財といふものを毛蟲のやうに嫌ふからである。さういふことは、所詮夫に知れずにはゐない。庄兵衛は五節供だといつては里方から物をもらひ、子供の七五三の祝だといつては里方から子供に衣類をもらふのでさへ、心苦しく思つてゐるのだから、暮しの穴を塡めて貰つたのに氣が附いては、好い顏はしない。格別平和を破るやうなことのない羽田の家に、折々波風の起るのは、これが原因である。

庄兵衛は今喜助の話を聞いて、喜助の身の上をわが身の上に引比べて見た。喜助は仕事をして給料を取つても、右から左へ人手に渡してなくしてしまふといつた。いかにも哀な氣の毒な境界である。しかし一轉してわが身の上を顧みれば、彼と我との間に、果してどれほどの差があるか。自分も上からもらふ扶持米を、右から左へ人手に渡して暮してゐるに過ぎぬではないか。彼と我との相違は、謂はば算盤の桁が違つてゐるだけで、喜助の有難がる二百文に相當する貯蓄だに、こつちはないのである。

さて桁を違へて考へて見れば、鳥目二百文をでも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでゐるのに無理はない。その心持はこつちから察して遣ることが出來る。しかし、いかに桁を違へ

て考へて見ても、不思議なのは、喜助の慾のないこと、足ることを知つてゐることである。

喜助は世間で仕事を見附けるのに苦しんだ。それを見附けさへすれば、骨を惜しまずに働いて、やう〳〵口を糊することの出來るだけで滿足した。そこで牢にはいつてからは、今まで得難かつた食が、殆ど天から授けられるやうに、働かずに得られるのに驚いて、生まれてから知らぬ滿足を覺えたのである。

庄兵衛はいかに桁を違へて考へて見ても、こゝに彼と我との間に、大いなる懸隔のあることを知つた。自分の扶持米で立てて行く暮しは、折々足らぬことがあるにしても、大抵出納が合つてゐる。手一ぱいの生活である。然るにそこに滿足

を覺えたことは殆どない。常は幸とも不幸とも感ぜずに過してゐる。しかし心の奥には、かうして暮してゐて、ふいとお役御免になつたらどうしよう、大病にでもなつたらどうしようといふ疑懼が潛んでゐて、折々妻が里方から金を取出して來て穴塡めをしたことなどが分かると、この疑懼が意識の閾の上に頭を擡げて來るのである。

一體この懸隔はどうして生じて來るだらう。唯うはべだけを見て、それは喜助には身に係累がないのに、こつちにはあるからだといつてしまへばそれまでである。しかしそれは嘘である。よしや自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のやうな心持にはなられさうにない。この根柢はもつと深い處にあるやうだと、庄兵衛は思つた。

庄兵衛は、唯漠然と、人の一生といふやうなことを思つて見た。人は身に病があると、この病がなかつたらと思ふ。その日その日の食がないと、食つて行かれたらと思ふ。萬一の時に備へる蓄がないと、少しでも蓄があつたらと思ふ。蓄があつても、又その蓄へがもつと多かつたらと思ふ。かくの如くに先から先へと考へて見れば、人はどこまで往つて踏止ることが出來るものやら分からない。それを今目の前で踏止つて見せてくれるのがこの喜助だと、庄兵衛は氣が附いた。

庄兵衛は今さらのやうに驚異の目を睜つて喜助を見た。この時庄兵衛は、空を仰いでゐる喜助の頭から毫光がさすやうに思つた。

（鷗外全集）

一一 國文學の精神

國文學の精神は何であるか。或は月花をめでるといふ、優美な意味に取られてゐる場合も多いであらう。しかし、よく考へて見れば、もつと生活的意味の深い種々の方面があるに相違ない。私はこゝに國文學を流れる精神として、まことと、もののあはれと、幽玄といふ三つの點について考へて見ようと思ふ。

第一にまことの精神とは、あるがまゝのもの卽ち事實をあるがまゝに表現する精神を中心としてゐる。これが上古の國文學を貫く精神であると見られると思ふ。これを內容的思潮的方面から見ると、そこに強い國家的精神と個人的精神

とが現れてゐる。國家的精神は古事記を中心として見られる精神で、この國家は神によつて作られ、宇宙も人類も亦神によつて作られたと見るのであつて、神を中心として生きる精神であり、同じ神の中に自然神もあり、人格神もあり、人格神の中に英雄神もあり、祖先神もあり、色々であるが、何れにしても、自己より偉大なる神によつて生きる精神は、古代人の眞實なる心もちのまゝ古事記に表現されてゐるのである。もとよりそこには想像もあり、超現實的なことも多いのであるが、後世の如く意識的に創作したものでなく、彼等に眞實なものとして映じたものがそのまゝに傳はつてゐるのである。

さてまた萬葉集の中心となる精神は個人的の精神であると思ふ。人麿は國家の建設を說き、神を歌つてゐるが、その中

皇子　天武天皇の御子草壁皇子・高市皇子等

心は皇子の薨去をいたむ哀痛の感情にある。かくて一方には自然に只管なる愛を向けるやうになり、自然の中に身を投入れて、そこに自己と自然との一つになつた境地が見られる。また一方には人生に向かつて情熱的な愛を歌ひ、或はこの人生の享樂すべきを歌ひ、或ははかなき世であつても、現實にある間は現實をよりよく生きていかうとする、強い現實に發する愛を歌つてゐるのである。

この素樸な、まことの感情を中心とする上代人のものの見方を見つめていくと、第一に一元的・綜合的である。神と人、自然と人を一つのものとして眺める。第二に率直にして積極的である。見方が單純で、紆餘曲折がない。第三に物を觀察するに多く具象的である。歌を詠むにも、目に觸れた事象を

先づ歌ふ。對象をあるがまゝに直觀し、これを直接的に表現するのである。而してこの精神は、文化が爛熟したとき、復古的精神として常に現れて來るのである。復古的精神とは單に文字通り古に復るのではない、古代人の眞實性と素樸性とに復ることがその精神である。例へば平安末期に於て、現實生活に頽廢と行づまりとを生じたとき、實朝は萬葉集の精神に復つて、その素樸性と眞實性とを求めたのであると思ふ。かくて實朝の心境を見ると、一方には國家的精神が現れてゐる。

源實朝像

山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心
我あらめやも

一方には人間的な愛の精神が現れてゐる。

いとほしや見るに涙もとゞまらず親もなき子
の母をたづぬる

また自然を歌ふにしても、實朝の歌は萬葉時代のやうにありのまゝを見つめ、ありのまゝに表現するといふ態度が現れてゐる。

第二に、もののあはれの精神は、ものの中に見出したあはれの精神である。あるがまゝのものの上に見出した、あるべき世界である。それは心と形との調和の中に見出される情熱の世界であるともいへる。本居宣長は、もののあはれを源氏

物語の基調であるとし、また平安時代文學の基調としてゐる。それは上古文學の中に見える素樸な感情ではなく、それをあくまで洗煉した境地である。あるがまゝのものから、あるべきものを見出し、それを高揚せしめた境地である。高天原の岩戸の前の神樂に、「あはれ、あなおもしろ、あなたのし。」とある「あはれ」である。隨つてそれは春の朝のほがらかな感情にも、秋の夕の寂しさの感情にも見出される。この精神が平安時代の文學のすべての上に見出される。これを歌の上に見るに、平安時代の歌は萬葉時代のやうに感情を直接的に表現するより、それを反省する所から、理智的傾向になる點がある。從つて、強烈なる感情を沈靜にし、情趣化する。古今集の歌がそれである。そこに素樸的から技巧的な點も生ずると思ふ。

俊成
姓は藤原
歌人
皇太后大夫
千載集の撰者
一八六四年歿

西行
俗名佐藤義清
歌僧
一八五〇年寂

平家物語は敍事詩的の物語であるが、勇壯な戰鬪の間を色どつて流れてゐるものは、もののあはれの精神である。そしてそこに華やかな、勇壯な悲壯美を形づくつてゐると思ふ。

第三に、幽玄の精神を考へて見たい。古今集の眞名序に、「或ハ事神異ニ關シ、或ハ興幽玄ニ入ル。」とあつて、本來はもののあはれとほゞ相近い意味であるが、平安末期の世相の轉變から人生の無常を觀じ來り、宗教的の考が深く入込んで、物寂しい境地を主とするやうになつた。俊成が得意な歌として、

ゆふされば野邊の秋風身にしみてうづらなく
なり深草のさと

を擧げたと傳へられる點から見ても、その邊の消息がわかるであらう。西行が自然の中に放浪する事によつて、その靜寂

の境地を見出して來たのも、それである。美しく咲く櫻の花かげにひそむ靜けさ、寂しさを見出したのが西行であつたと思ふ。而してその幽玄は俊成のよくいふ遠白い卽ち壯大といふ感情と、心が細い卽ち纖細といふ情趣とを結びつけ、統一した中に見出される精神である。

而してこの精神は、一歩進めて考へると、近古文學を流れる傳統的精神や、個人を否定して普遍の中に生きようとする精神と一致するものがあると思ふ。卽ち文學を個性的にそのまゝ表現せず、これを傳統の、型の中に入れて、そこからいぶしにかけた上で表現するのである。大きな自由の精神を、型といふ窮屈な狹いものの中に入れ、それを凝縮し結晶せしめて、そこから水晶のやうな透明なものを作り出さうとするのである。これは徒然草に見える道といふ事によつてもわかる。

徒然草
二卷
吉野時代に成つた隨筆集
作者吉田兼好

「愚かにして愼めるは巧にしてほしいまゝなるにまさる」といふのは、畢竟、道は一つの型に入れて精練して始めてすぐれたものとなると考へたのである。そこに專門家を敬する心持が出て、型の文學或は道の文學を重んずる心持が生ずる。この型の中に入れる事によつて、その小さい我の否定された中から現れて來る大きな自然、こゝに幽玄が現れて來ると思ふ。茶にしても、庭にしても、型の中に入つて、しかも型に捉はれない自由な境地を見出して來るのではあるまいか。それは最も小さいものの中にある最も大いなる生活である。而してこれは室町時代の藝術を代表する能樂に於てもさうである。一つの型の中に入れて、その中に普遍的な人間性を表さうと

世阿彌
本名結崎元清
觀阿彌の子
謠曲作者　能役者
二一一五年歿

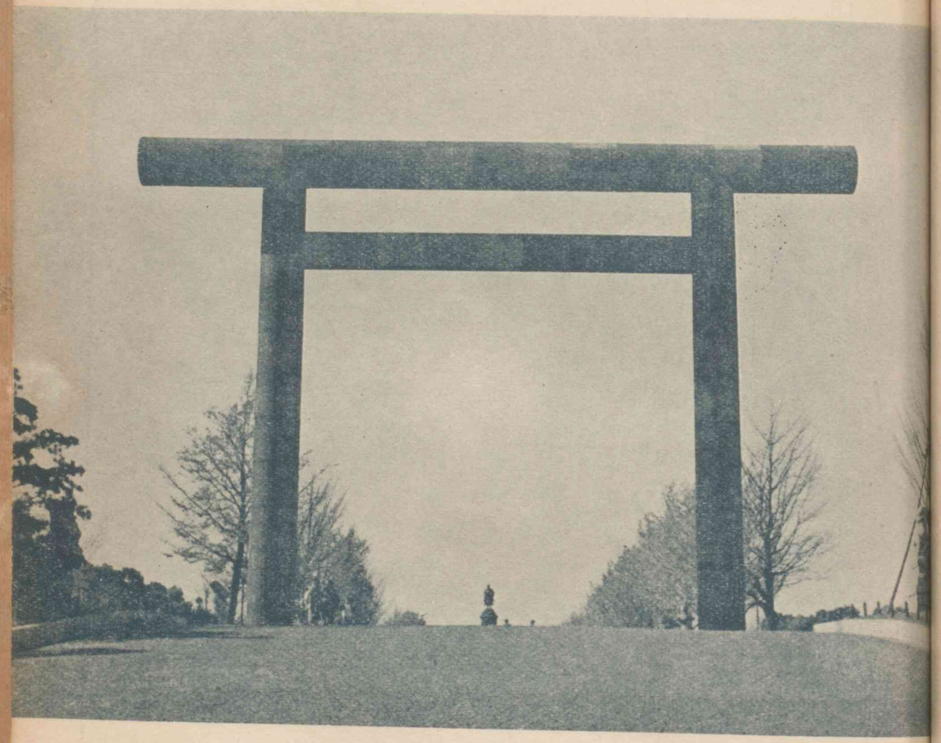
してゐる。非家では到底味はふ事の出來ない境地である。世阿彌のいふ幽玄の精神も、やはりそこにあると思ふ。この幽玄は、近世文學に於ては、更に芭蕉の閑寂の精神ともなつてゐる。芭蕉は自然を深く凝視して、その本質をさびであると見たのみならず、このさびに徹して、さびを生活の上に見出して來てゐる。「高く心をさとり俗にかへるべし」といふのは、生活をさび化し、幽玄化する事であると解せられる。かくの如くにして、自然と人生との窮極であるところのさびや幽玄は、また藝術の窮極でもあつたのである。

あるがまゝのものに理念を見出した境地がまことであり、あるがまゝのものの中から、あらうとするものを見出して表現したのがもののあはれであり、更に自然と人生と藝術とを

結びつけて、それをいぶしにかけて統一せしめ、結晶せしめた大白光の如き境地が幽玄であらう。童のやうな素樸さから華やかな境地となり、そして、さびに達するのである。

かくの如く見るとき、まことと、もののあはれと、幽玄とは一見異なつた理念のやうで、しかも本質的な相違ではなく、展開のそれ〴〵の過程である。まことが童心と素樸との藝術を生み出し、もののあはれが心と形との融合調和した藝術を生み出し、更に幽玄がすべての大きな自然や人生を型の中に入れて、その間から結晶した白光として表さうとする、或點からいへば象徴的な藝術を生み出したかと思ふ。而して、これらの展開流動する精神を統一したもの、そこに國文學の本質が見出されるであらう。

（上代日本文學の研究）



靖國神社大鳥居

二鳥居

岸田日出刀
建築學者
工學博士
東京帝國大學
教授
明治三十二年
生

神苑を象徴するものは鳥居であり、更に鳥居は神國日本を象徴するものといへよう。

鳥居の起源は、本邦上代の宮室等にあつて、家の周圍を取圍む垣や塀の出入口に設けた門柱にあると考へられる。即ち、今日滿洲地方の農家の塀に見るやうな上に横木を架した、二本の出入口が鳥居の起源をなしたと考へられる。尤も一説には鳥居の起源は印度のトラナといふ大規模の墳墓の標柱にあるとされ、事實、二本の柱や上に載せられた横木の具合などには鳥居に似通つた點が認められるが、その材料は石であり、また、その柱の上や横木には澤山の裝飾が加へられて、日本

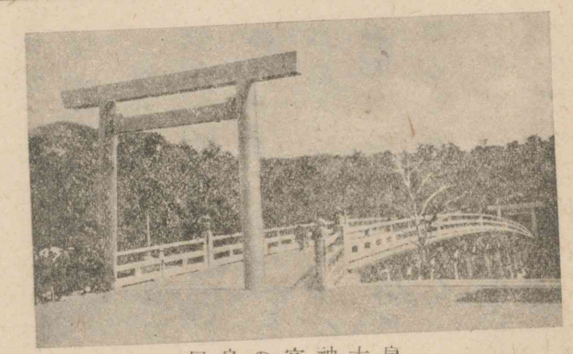
の鳥居のもつ簡素の美しさは毫も見られないから、單に語音が似てゐるといふ以外に深い連絡關係はないと見るのが正しいやうである。

垣や塀の出入口に二本の柱を立てて上に横木を架するやり方は、素朴だつた上代人が考へ出すのに極めて自然の門構の作り方で、それが鳥居といふものに形式を整へられたと思はれる。このことは、神社の本が上代宮室の制を傳へることから起つたといふ明らかな事實と併せ考へて、なるほどと肯けることでもある。

竪に柱を二本立て、上に横木を一本架けるだけでは、構造上の強度が不十分であるから、上の横木の下近く更にも一つの横木を渡し、こゝに鳥居の原型が出來上つたものであらう。

鳥居として最も古い形式を傳へる伊勢兩宮の神明鳥居は、この原型を忠實に今日に傳へてゐる。

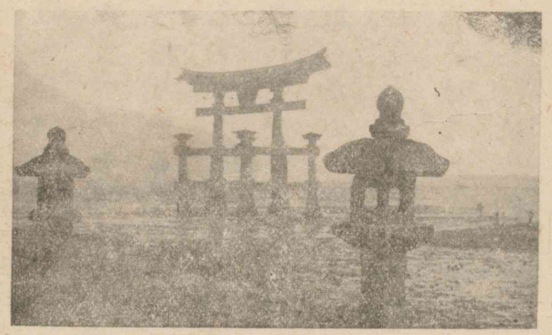
今日、神社の數は、內務省に登錄されてゐるものだけでも十二萬以上の多數に及び、この外登錄されてゐないものが夥しく存在するから、一社一鳥居としても鳥居數は莫大な數に上り、更に一社に數個の鳥居を備へるものも尠くなく、また社殿はなくとも山や野や畑に鳥居だけが立てられたりするから、日本全國の鳥居の總數は蓋し驚くべき數に上るであらう。



皇大神宮の鳥居

神社と鳥居とは離るべからざる關係にあり、神社あれば必ず鳥居が立つ。鳥居があつて始めて神社の存在が具象化される。

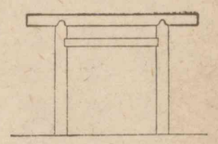
平安時代の末神佛習合說が行はれ、神社建築の形式と佛寺建築の形式とが、互に相混淆する傾向となつて、神社建築に佛寺建築の形式手法が多分に混入し出すと共に、佛寺建築の中へも神社建築の形式手法が混入するやうになつて、從來鳥居といへば神社に附隨して立つと決つてゐたものが、この頃以後は佛寺伽藍の中にまで立つやうになつた。



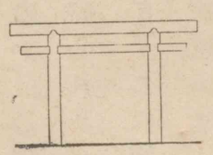
嚴島神社の鳥居

日光廟の正面に鳥居が立つのは、廟といふものが本來神社と佛寺と墳墓の要素の互に相混淆したものであるから、あまり不自然とも思へぬが、ちやんとした佛寺の境内などに鳥居が立つのを見ると、如何にも不自然であり不調和であり、更に滑稽な感もする。神社で鳥居の立つべき位置に丹塗の樓門などがきらびやかに立つたりするのは、見て華やかに親しみ易い氣分は起るが、神社らしく神々しい雰圍氣は殘念ながら起らない。春日神社や嚴島神社はかうした例で、神社の種類によつてはかやうな安易な親和性に富む神佛混合の形式も惡くはなからうが、神社が神社としての神嚴さを具有するためには、佛寺的形式要素の混入はつとめて避けるのが本旨であらう。

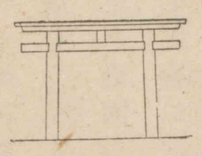
靖國神社に詣でる。神明鳥居に屬するその簡明な靖國鳥居をくぐり、日本建築の粹ともいふべきその神門の前に立つとき、護國の英靈永へに眠ります御社を拜するの氣がひしひしと胸に迫るのを覺える。神社建築はこれでなければいけない。鳥居が丹塗の樓門だつたら、さうした精神上の緊張は得られない。造形物が人の心を支配することの意義が如實にそこに窺はれる。皇大神宮を拜するとき、我々の心には國を思ふこと以外の何等の想念も浮かばないし、靖國神社に詣でるとき、護國の英靈によせる感激と感謝の外何ものもない。神を想うて他に何ものもない境地に人の心を導くにふさはしい形式を整へることに、神社建築の要訣がある。そしてかかる形式の先頭に鳥居が立つ。



神明鳥居



鹿島鳥居

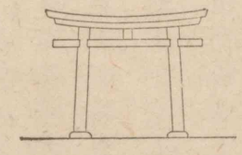


八幡鳥居

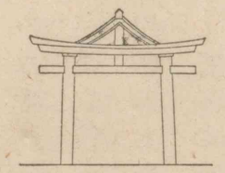
我々日本人はその生活に於てあまりにも鳥居に慣過ぎてゐるから、鳥居を見ても何とも思はぬのが常である。しかし鳥居は考へてみると不思議なものである。竪に二本、横に二本の材で造られる簡單なものであるが、見れば見るほど、味はへば味はふほど美しくもまた趣深いものである。

鳥居の形式にも、鹿島鳥居・明神鳥居・山王鳥居・三輪鳥居・八幡鳥居などといろ〳〵の種類があるが、鳥居の原型とも考へられる神明鳥居をとつて考へてみよう。

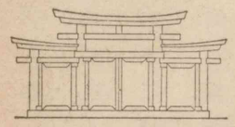
左右に二本の柱が立ち、上に笠木が横に架



明神鳥居



山王鳥居



三輪鳥居

けられ、笠木の兩端は二本の柱のところよりもかなり左右に突出してゐる。二本の柱と一本の横木だけでは強さも十分でないから、笠木の下に更に一本の貫といふ横木を渡し、合計竪二本横二本で組立てられてゐる。柱と笠木は丸く、貫は矩形の斷面をもち、材はみな眞直で、曲線は使はれてゐない。實に簡單明快な構成であり、無駄の裝飾の類は一切なく、必要缺くべからざる材だけで作られて、而もそこに立派な比例の整つた形が完成されてゐるのには、たゞ〳〵感心させられる。

神明鳥居の貫が柱を貫いて左右に突出し

鹿島神宮
茨城縣鹿島町

た形式のものを鹿島鳥居といひ、鹿島神宮の鳥居はこの式のものである。更にこの鹿島鳥居の笠木が稍複雜となり、上に笠木、下に島木をもつ二重の笠木となり、島木と貫との中間柱の中央部に額束を備へた形式のものを八幡鳥居といふ。この八幡鳥居の笠木と島木に曲線を加味し、柱も掘立でなしに柱礎を備へたものを明神鳥居といふ。更にこの明神鳥居を複雜にしたものに、山王鳥居・三輪鳥居のやうな賑やかな形をしたものがある。

これら數種の鳥居の形式のうちどれが好ましいかは、それが立てられる神社の種類や周圍の環境等によつて異なるが、曲線を毫も交へず、材の數も少く、極めて自然に、何等の作意なく作られた神明鳥居が、我々の頭に考へる神社なるものの概

念を最もよく象徴してゐると思ふ。「鳥居はシンプル(簡單)でノーブル(高雅)で日本のシンボル(象徴)である」と一外國人が評したさうだが、それはまことに適切の評で、かやうな評はこの神明鳥居の簡明さに最もよく當るものである。

建築に曲線を用ひるのは大陸の影響で、佛教建築移入前の日本には原則としてなかつたところである。それが鳥居にまで取入れられて、明神鳥居・山王鳥居等の現れたのは、佛寺の屋根に見る曲線の取扱に影響されたためである。

鳥居に種々の形式があるやうに、神社にも數多くの形式が分類される。かゝる神社建築の分類は、本殿の建築形式の差異によつてなされるものであるが、概して後世のものほど複雜さを增すのを常としてをり、原始神道に屬する上代に創め

られた神社ほど、その本殿は簡素である。本殿が簡素ならその附屬の建造物も簡素なものとなるのが自然で、そこに神社建築全體としてのまとまりや、調和や、統一やが完成される道理である。

神明鳥居がその美の極致をよく發揮するのも、本殿が神明造の簡素明快の建築形式である場合に於てである。皇大神宮に詣でる時、その御本殿の建築形式とその鳥居の構成とが、如何によく調和してゐるかを仰ぎ見るべきである。胸打つ神氣は、更にその建築的理解に助けられて、愈高鳴るであらう。

神明の字を逆にした明神の鳥居には、神明鳥居より多くの親和性はあるが、神明鳥居に見るやうな素朴さはない。だが、本殿の建築形式が各部に曲線を交へたり色彩が豐富に應用

されたりしてゐる場合には、明神鳥居もなか〳〵畫趣豐かな調和の美しさを呈するであらう。かうした實例の隨一に宮島の海に立つ嚴島神社の鳥居がある。この鳥居は大體明神鳥居で、海中の波に脅かされるから、柱に頑丈な支へがあるが、このたつた一つの鳥居が如何に宮島の價値を高めてゐることか。

今日、人々は複雜な西洋流の建築に見慣れてゐて、一本の鳥居を見て感興を涌かす人はあまりないやうである。だが、この一本の鳥居からだけでも、考へればいろ〳〵のことが絲車の絲の如くに繰出せる。造形意匠といふことだけに就いても、鳥居といふ命題から數限りない問題が提供される。(聖)

和辻哲郎
哲學者
文學博士
東京帝國大學
教授
明治二十二年
生

一三 家

和辻哲郎

ヨーロッパの都市の家は、豪富の人を除いて、個人が一つの建物を占有するのではない。建物を入ると左右に一戸づつの「家」がある。階段をのぼればそこにも左右に一戸づつの家がある。五階ならば十戸、六階ならば十二戸が廊下に面して存してゐる。更に入口から中庭へ抜けて他の入口に行けば、そこにも階段を持つた同じ意味の廊下が、同じ建物の中を上へのびてゐる。この廊下はいはば道路の延長である。否本來の意味に於ける往來である。そこでこの往來を通つてどれかの「家」の戸口を入るとする。そこに「家」の中の廊下がある。室々の戸口がこの廊下に向かつて開いてゐる。が、その室の

口は鍵で密閉し得るものであり、室相互の間の通路も亦密閉し得るやうに出來てゐる。從つて僅かに一擧手によつて各、の室が獨立した一つの「家」となり得る。故に他の家庭に何の煩ひも與へずに、その室を一つの「家」として住み得る。この點からは家の中の廊下も亦往來の資格を得ることが出來る。借間してゐる人の許へ書留郵便を屆けようとする配達夫が、建物の中の往來を通り、家の中の廊下を通つて、その人の室までやつてくるのは、この往來の意味をあらはに示したものである。日本の家の「玄關」に當るものがこゝでは個人の室の中にある。さうなると往來は個人の室の前まで來てゐることになる。個人が直接に往來に、從つて町に接觸するのである。

が、また逆に考へることも出來る。個人はおのが室に、或は

おのが「家」にゐるまゝの通常の姿で廊下へ出る。そこで一寸帽子を頭へのせて、も一つ外の廊下へ出る。それから階段を下りて、建物の入口から更にもう一つ外の「廊下」へそのまゝの姿で出る。そのアスファルト敷の通路は、朝毎に水で洗はれて、建物の中の廊下よりも汚くはない。たゞそれが屋内の廊下と異なるのは、上に空が見え、冬には煖房の設備がないことだけに過ぎぬ。人はこの廊下を通つて飲食店へ行つて食事をする。或はカフェーへ行つて、一杯のコーヒーを前にして音樂を聞き、カルタを弄ぶ。それは大きい家の中で、長い廊下を傳つて食堂へ行き、或は客間へ行くのと何の異なるところもない。それは單に一つの室を家とする獨身者に限つたことでなく、一つの家族としても日常に行ふところである。彼

らは丁度日本の家族が茶の間に集つて無駄話をしたり、ラヂオを聞いたりすると同じ意味で、カフェーへ行つて音樂を聞き、カルタを弄ぶ。カフェーは茶の間であり、往來は廊下である。この點からいへば、町全體が一つの「家」になる。鍵を以て個人が社會からおのれを距てる一つの關門を出れば、そこには共同の食堂、共同の茶の間、共同の書齋、共同の庭がある。

故に廊下は往來であり、往來は廊下である。兩者を判然と區切る關門はどこにもない。といふことは、「家」の意味が一方では個人の私室にまで縮小され、他方では町全體に押しひろげられるといふことに外ならぬ。後の場合はつまり「家」の意味が消失したといふことである。家がなくしてたゞ個人と社會とがあるといふことである。

日本には明らかに「家」がある。廊下は全然往來となることなく、また往來は全然廊下となることがない。その關門としての玄關或は入口は、そこで截然と廊下と往來の別、內と外の別を立ててゐる。我々は玄關を入る時には「脫ぐ」ことを要し、玄關を出る時には「はく」ことを要する。配達夫も小僧もこの關門を入ることは出來ない。カフェーも飲食店もすべて「その家」であつて、決して食堂や茶の間の意味を持たない。食堂や茶の間はあくまでも私的のものであつて、共同的のものでない。

日本人はこのやうな「家」に住むことを欲し、そこでのみ寬ぎ得る。たとひどれほど小さくとも、このやうな「家」としての資格を有するものを住居として求める。それほどの執著を起

させる魅力はどこにあるのであらうか。「家」は截然と外なる町に對しておのれを區別してゐるが、しかしその內部に於ては、室の獨立といふことは全然ない。室をへだてるものは、襖・障子であるが、それらは鍵をかけるといふが如き防禦的對抗的な「へだて」の意志の表現としての性格を曾て帶びたこともないし、またその可能性も持たない。それを明けようと欲する人に對しては、それを拒み得る何の力もそこに與へられてをらぬ。しかもそれが或意味の「へだて」として役立つのは、それが閉されてゐるといふことによつて表示されてゐる「へだて」の意志が、他の人によつて常に尊重されるといふ、相互の信賴に基づくのである。即ち「家」の中にあつては人々はおのれを護つて他に對するといふ必要を感じない。

それはいひかへれば、おのれと他との間に「へだて」がないことである。鍵は他の意志に對して「へだて」の意志を表現するが、襖・障子はむしろ「へだてなき」意志を表現しつゝ、その「へだてなさ」の上に於て、たゞ室を仕切るに外ならぬ。いはば、それは一つの西洋間の中に置かれた衝立の意味しか持たない。鍵を以て護るといふやうな意味の個人は、「家」の中では解消する。かゝる「へだてなさ」を内に包みつゝ、外の世界に對しては鍵のあらゆる變形(その内には高い板塀や恐しげな逆茂木などもある)を以て對抗するのが日本の「家」である。もしもそこに魅力があるとすれば、それはこの小さな世界の内部に於ける「へだてなさ」に外ならぬであらう。

が、人は問ふかも知れない、このやうな小さい世界は西洋風

桃山時代
秀吉が關白に任ぜられてからその歿年まで

の長屋に於ても保存し得るではないかと。しかし、この西洋風の長屋は、それを作る時に共同的な協力を必要とするのみならず、その存立が居住者の共同的な態度を豫想するものである。たとひ廊下をへだてた隣と互に交際をしないやうな狀態に於ても、それはなほ一つの組織であつて、煖房の設備、湯の設備、昇降器の使用等に於て、常に共同的であることを免れない。さうしてこの共同的であることが日本人をして最も不安ならしめるものなのである。それは總じて日本に於ける最も強い「へだて」が、家と外なる世界との間に存することによつて顯はにされてゐる。ヨーロッパに於ては、最も強い「へだて」は過去にあつては町を取卷く城壁であり、現在にあつては國境であるが、日本にはその何れもが存しない。桃山時代

の前後に諸地方の城下町が壕と土手を以て取圍まれたが、しかしそれは武士の一群が他の攻撃を豫想して作つた防禦工事であつて、この町が他に對しておのれを護りへだてる意志を表したものではない。ヨーロッパの町の城壁に當るものは、日本に於てはまさしく家のまはりの垣根であり、塀であり、戸閉りである。從つてヨーロッパ人が城壁の内部の世界に於て永い間訓練されたと同じことを、日本人は垣根の内部のもつと小さい世界に於て訓練されたのである。城壁の内部に於ては、人々は共同の敵に對して團結し、共同の力を以ておのれが生命を護つた。共同を危くすることは隣人のみならず、おのが生存をも危くすることであつた。そこで共同が生活の基調として、そのあらゆる生活の仕方を規定した。義務

の意識はあらゆる道德的意識の最も前面に立つものとなつた。それと共に、個人を埋沒しようとするこの共同が強く個人性を覺醒させ、個人の權利はその義務の半面として同じく意識の前面に立つに至つた。だから「城壁」と「鍵」とは、この生活樣式の象徴である。

然るに垣根の内部の小さい世界に於ては、その共同は生命を危くするといふ如き、敵に對するものでなかつたと共に、また容易に獻身的な態度を引出し得る如き、自然的な情愛に基づいたものであつた。夫婦・親子・兄弟、これらの間では義務の意識よりも愛情が先立つ。個人は喜んでおのれを沒却しつつ、そこに生活の滿足を感じ得る。共同が「個人」を待つて始めてその意義を發揮し得るとすれば、個人が喜んでおのれを沒

却するこの小さい世界に於ては、共同そのものが發達し得なかつたのは當然であらう。そこで人々はおのが權利を主張しなかつたと共に、また公共生活に於ける義務の意識にも達しなかつた。さうして、この小さな世界にふさはしい「思ひやり」「控へ目」、「いたはり」といふ如き纖細な心情を發達させた。それらはたゞ小さい世界に於てのみ通用し、相互に愛情なき外の世界に對しては力の乏しいものであつたが故に、その半面には、家を一歩出ると共に仇敵に取圍まれてゐると覺悟するやうな、非社交的な心情をも伴なつた。だから「家」のまはりの垣根が丁度城壁と鍵に當るのである。かく見れば「家」の内部に於ける「距てなさ」への要求が強ければ強いほど、共同への嫌惡も亦強いといふ所以が明らかになるであらう。（風土）

沼田頼輔
考古學者
紋章學者
文學博士
昭和九年歿

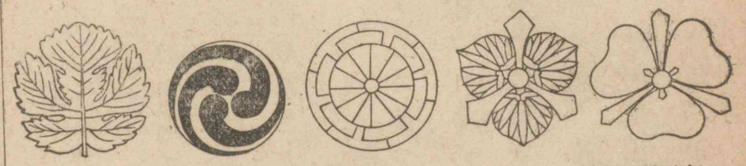
一四　紋章

沼田頼輔

我が國では、家があれば苗字があり、苗字があれば必ず紋所があつて、近頃は白襟黑紋附といふほど、禮服には必ず紋所を附けることになつてゐる。

而してこの紋章は、本來武家時代に、或標章を旗や幕の目印として使つたのに始り、その結果武張つた意味を含んだものが甚だ多い。例へば劍酢漿草（けんかたばみ）・劍葵・劍桔梗などといつて、劍を花の間に取合はせてゐるのがそれで、それのみならず兜の鍬形や、總角や、脛楯や、その他弓矢は勿論、武器に關するものは、悉く紋所に用ひられてゐるといつてよい。但し、かういふ武張つた紋所は多く武家に用ひられて、公家には全く用ひられな

徳冨蘇峰
名は猪一郎
評論家
貴族院議員
二五二三年生



剣酢漿草　三剣葵　源氏車　那須の紋　平戸梶

かつたから、この種類の紋所を、尚武的紋章と呼ぶ。

これを第一種として、第二種は、戰爭の際の功名手柄を後世に傳へるために作つた紋章で、これを記念的紋章と名づける。例へば徳冨蘇峰氏の紋所を見ると、八角の中に巴が描かれてゐる。八角は隅切の折敷といつて、神に供物を奉る時に用ひるもので、徳冨氏の話によると、氏の先祖が、天草の亂の時敵の大將の首を取つて、これを首實驗に供するために、隅切折敷に載せて大將の見參に備へたことがあつたのに因んで、この紋所を作つたといふことであるが、巴は昔

九條の藤　内藤藤　上り藤　井筒　違井筒

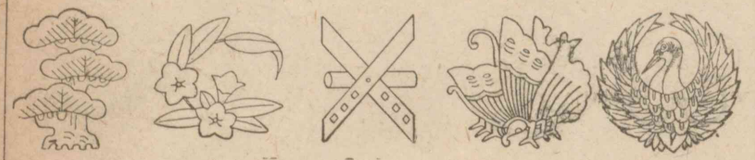
から一つ頭・二つ頭などと呼んだから、これを、敵將の首に擬へ、折敷に組合はせて、新しい紋所を組立てたことは、如何にも武家にふさはしい話である。かういふ種類の紋所は他にも澤山あつて、例へば關原の合戰に、土佐の樫井といふ士が、敵將の首を取つた記念に、生首を紋所にした例もある。又、源平屋島の戰に那須與一が平家の扇を射落した晴れやかな功名を偲ぶために、その子孫の中には、日の丸の扇を紋所に用ひてゐるものがあるといふ。

第三種は指示的紋章と名づけるもので、概して苗字に因んだものである。例へば吉野とい

雲上明覽
紋章の書
二四九七年の
刊行
編者未詳

重菊　菊　水　鳥居に大の字　大の字重ね　七五桐

ふ苗字の者が櫻の花を紋所にし、堀井・酒井・駒井・井伊・澤井などいふ井の字の附く苗字の者が、井の字、或は井桁・井筒などを用ひる類で、これらはその紋所を見て、これが何家の紋所かといふことが、すぐに指示されるやうに作られたものである。近藤・遠藤・伊藤・佐藤・加藤・工藤・内藤などいふ苗字の家が、比較的多く藤の紋所を用ひてゐるのも、この種類に屬する。藤の紋所については藤原氏から出た家が用ひるといふ説もあるが、全くの誤で、それは雲上明覽に據ると、藤原氏から出た公家が總計九十七軒あつて、その中藤の紋を用ひてゐるものが僅か七家だけである



鶴　揚羽の蝶　千木勝魚木　枝龍膽　三蓋松

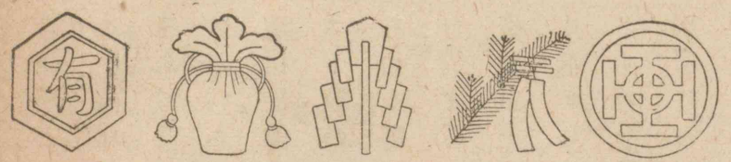
のを見てもわかる。

第四種は瑞祥的紋章ともいふべきものである。これは息災延命・福德圓滿・子孫繁昌など、俗にいふ緣起のよい事に因んで工夫されたもので、大別すると文字と繪模樣との二いろがあり、文字の方では、指事の意義を離れて、天・長・大・福・吉・利等のめでたい文字を用ひたのは、すべてこれに屬する。石田氏・山内氏などに用ひられた大吉・大一・大万の六字を寄集めた紋章などはその最適例であらう。繪模樣の方も同じく指事の意義を離れたのが皆これに屬し、その第一に擧ぐべきは、畏くも皇室の御紋章の菊花である。

抱杜若　立杜若　龍膽　三楓　瓜實梅鉢

これは花の姿が端正優雅で氣品が高い上に、延命の瑞草として重陽の嘉節に用ひられるのに因んだので、誠に瑞祥中の瑞祥と申すべきものである。また桐の紋は、この木に靈鳥鳳凰が棲むことに因んだものであり、楠氏の菊水は、菊の下水を掬んで長壽を保つといふ支那の古傳說に據つたものである。その他、千年の齡にあやかる意で鶴を用ひ、萬歲の壽を祝つて龜を用ひるなど、この種の紋章の數の多いことは、さすがに緣起を好む人間の心理を現してゐる。

第五種は尙美的紋章で、これは多く公家に用ひられた。公家には家系によつて、衣裳や車な



中川クルス　祇園守　一幣　一瓶子　有字紋

どの裝飾に代々極つて用ひられた文樣があつたが、それを紋所にしたのがこれである。例へば花山院家の杜若、今出川家の楓、或は久我家の龍膽の如きは、いづれも車や著物の文樣として用ひられたものが、後世紋所が行はれるやうになつてから、その方面に轉用されたものである。これらの紋所は、もと單に美しいといふ好みによつて用ひ始められたものである。

第六種は信仰の意味から用ひられたもの、卽ち信仰的紋章で、これには隨分澤山の種類がある。例へば戰國時代にはキリスト教が盛に行はれたので、この教を信ずる者は、多くクロッス

中川清秀
織田信長の臣
二二四三年歿

を紋所とした。その一例を擧げると、有名な賤嶽の三振太刀の一人中川清秀は、當時の名高いキリスト教信者であつた。それ故、その子孫は、今でも「中川クルス」と稱して、パテントークルスといふものを用ひてゐる。備前の岡山、因幡の鳥取、この兩池田侯爵家は祇園守といふ紋所を用ひてゐるが、これはキリスト教のアンドリューークルスから出たものである。人の知る如く、島原の亂以來、キリスト教は嚴しい國禁となつて、これを信ずるものは、大名でも、士でも、或は死刑に處せられ、或は家祿を召上げられることになつて、この教に關係のあるものは、片端からその影を潛めたが、それにもかゝはらず、戰國時代にキリスト教を信じた大名の子孫は、大抵クロッス系統の紋を用ひてゐた。

信仰的紋章の中では、神に關係したものが比較的澤山ある。例へば鳥居・瑞籬・欄干・御幣・額・瓶子・千木・鰹木など、苟も神社に關係のあるものは、概ね紋所に用ひられて、さすがに日本は神の國だと思はせる。これに反して佛教關係の紋所は多くないが、これは神道の現世的なるに反して、佛教が超現世的なるに基づくのであらう。仙石子爵の紋所が「無」の字を用ひてゐるのは、禪宗の「趙州無字」といふ故事から來たもので、少い例の一つである。

我々の家に紋所があるやうに、神社にもまた社紋といつて、極つた紋所を用ひてゐるのがある。例へば、天滿宮の梅鉢の紋、諏訪神社の梶の葉の紋、八幡宮の巴の紋、出雲大社の龜甲に「有」の字の紋の如きがそれである。出雲で「有」の字を用ひるの

は、社傳に據ると、出雲では、祭神の大國主尊が杵築に鎭座せられたのが十月であつたといふので、この月を鎭座月といひ、十月の二字を組合はせると「有」の字になるので、それを神紋に定めたといふ。

とにかく我が國では、家にも神社にも定まつた紋章があつて、それに歴史的・精神的の重大な意義があるから、紋所の研究がその方面の關係學に取つて大切であるばかりでなく、これについて一通りの知識と趣味とを持つことは、修養ある國民の一種の嗜みともいふべきものであらう。

（日本紋章學に據る）

谷崎潤一郎
小説家
明治十九年生

一五 料理

谷崎潤一郎

私は、吸物椀を前にして、椀が微かに耳の奥へ沁みるやうにじいと鳴つてゐる、あの遠い蟲の音のやうな音を聽きつゝ、これから食べる物の味はひに思をひそめる時、いつも自分が三味境に引入れられるのを覺える。茶人が湯のたぎる音に尾の上の松風を連想しながら、無我の境に入るといふのも、恐らくそれに似た心持なのであらう。日本の料理は「食ふもので、なくて見るものだ」といはれるが、かういふ場合、私は見るものである以上に瞑想するものであるといはう。さうしてそれは、闇にまたゝく蠟燭の灯と、漆の器とが合奏する無言の音樂の作用なのである。

漱石
夏目漱石
六九頁參照

嘗て漱石先生は、「草枕」の中で、羊羹の色を讃美してをられたことがあつたが、さういへば、あの色などは矢張り瞑想的ではないか。玉のやうに半透明に曇つた肌が、奥の方まで日の光を吸取つて、夢みる如きほの明るさをふくんでゐる感じ、あの色あひの深さ、複雑さは、西洋の菓子には絶對に見られない。クリームなどは、あれに比べると、何といふ淺はかさ、單純さであらう。だが、その羊羹の色あひも、あれを塗物の菓子器に入れて、肌の色が辛うじて見分けられる暗がりへ沈めると、ひとしほ瞑想的になる。人はあの冷たく滑かなものを口中にふくむ時、恰も室内の暗黑が一箇の甘い塊になつて舌の先で融けるのを感じ、ほんたうはさう旨くない羊羹でも、味に異樣な深みが添はるやうに思ふ。

蓋し、料理の色あひは何處の國でも食器の色や壁の色と調和するやうに工夫されてゐるのであらうが、日本料理は、明るい所で、白つちやけた器で食べては慥に食慾が半減する。たとへばわれ〳〵が毎朝食べる赤味噌の汁なども、あの色を考へると、昔の薄暗い家の中で發達したものであることが分かる。私は或茶會に呼ばれて味噌汁を出されたことがあつたが、いつもは何でもなく食べてゐた、あのどろ〳〵の赤土色をした汁が、覺束ない蠟燭のあかりの下で、黑漆の椀に澱んでゐるのを見ると、實に深みのある、うまさうな色をしてゐるのであつた。その外、醬油などにしても、上方では刺身や漬物やおひたしには濃い口の「たまり」を使ふが、あのねつとりしたつやのある汁が、いかに陰翳に富み、闇と調和することか。又、白味

噌や、豆腐や、蒲鉾や、とろゝ汁や、白身の刺身や、あゝいふ白い肌のものも、周圍を明るくしたのでは色が引立たない。第一、飯にしてからが、びか〳〵光る黒塗の飯櫃に入れられて暗い所に置かれてゐる方が、見ても美しく、食慾をも刺戟する。あの、炊きたての眞白な飯が、ぱつと蓋を取つた下から暖かさうな湯氣を吐きながら黒い器に盛上つて、一粒々々眞珠のやうにかゞやいてゐるのを見る時、日本人なら誰しも米の飯の有難さを感じるであらう。

かく考へて來ると、われ〳〵の料理が常に陰翳を基調とし、闇といふものと切つても切れない關係にあることを知るのである。

（攝陽隨筆）

小泉八雲
ラフカヂオー
ハーン
もと英國人
文學者
明治三十七年
歿

一六 表情

小泉八雲

日本人の微笑を會得するためには、稍古風な、自然のまゝの民衆生活に入る事ができなければならない。まだ流れ動く、さうした自然のまゝの平民社會には、西洋と東洋の人種的感情及び情緒的表情に於ける或外面的相違の意味をさがすことができるのである。生・愛・及び死に對して、常に微笑するそれらの溫和な、親切な、心のやさしい人々に接してこそ、我等は單純な感情の交を樂しむとともに、又親しみと同情とによつて、彼等の微笑の理由を知ることができる。

日本の子供は生まれながらにして微笑する傾向をもつてゐる。そしてこの微笑は、家庭教育の總べての時期を通じて、

お辭儀や平身低頭と同じく、又うるはしい古の禮儀作法と同じく、教へ込まれる。明らかな道理で、高笑は奬勵されない。長上や同輩に話しかける際、愉快な場合にも、愉快でない場合にも、たしなみの一つとして、微笑が求められる。最も愉快な顏はにこ〳〵顏で、それは兩親・親戚・教師・友人その他自分に好意を持つ總べての人に示すべきだとされてゐる。たとひ胸の張裂ける場合でも、しかつめらしく不機嫌な顏をするのは無禮で、社會的義務として、人々は微笑しなければならぬ。それは自分を愛してくれる人々に、心配や苦痛を與へないためであり、又、自分に好意を持たぬ人々に、つまらぬ好奇心を起させないためである。

微笑は幼年時代から義務として養成されるから、やがて本能

的になる。最も貧しい農夫とても、悲しみ、苦しみ、怒の顏を示されると、この人は自分に對して不親切だと考へる。勿論、日本に於ても、自然の悲歎には自然のはけ口がなければならないが、長上や客の面前に於て抑制なしに涙を流すのは無禮であるとされてゐる。それ故、如何に無學な田舍女でも、悲しみに負けて泣いた後で、いつもきまつて「取亂して失禮しました。お許し下さい」と微笑しながら詫びる。その微笑はたゞに道德的であるばかりでなく、或程度まで美的でさへある。ギリシヤ美術に於て苦痛の表情を調整したと同じ思想を幾分か表してゐる。

この微笑の第一の作法から第二の作法が發達する。それを守ることから、外國人は、日本人の感受性に關して、屢、殘酷な

誤解を抱く。例へば、痛ましく恐るべき事件を語る場合、當事者は微笑しながら話すのが日本の習慣である。そしてそのことがそれを話す人に不快であればあるほど、その微笑は低い穏やかな笑ひ聲に變る。自分は嘗て、初生兒を失つた母が、葬式の時烈しく泣いたにも係らず、奉公先で愛兒の死を微笑を以て語つたのを聞いて、その心事を怪しんだことがある。しかしその笑は克己の極端まで進んだ禮儀であつた。その意味はかうだつたのである。「可哀さうなこととお考へ下さいませうが、どうぞこんなつまらないことに御心配下さいますな。已むなくこんなことを申し上げてほんとに失禮しました。お許し下さい。」最も理解のできない微笑の祕密の鍵は日本人の禮儀正しさである。

過失のために解雇を宣告された婢僕は、平伏し微笑して容赦を願ふ。その微笑は無感覺や無禮の正反對である。「はい、全く仰しやる通りでございます。どんなに私が惡うございましたか、それを思へば恐しいほどでございます。私はお暇を戴きます。しかし、ほんとにあつかましい御願でございますが、どうか惡かつたことはお許し下さい。」

子供らしい涙を流す年齢以上に達した少年少女は、何かの過失のために罰せられると、微笑してその罰を受ける。その微笑はこんな意味である。「ほんとに申しわけございません。何と仰しやられましても私がいけなかつたのでございます。」これと同じ道理で、横濱にゐる私の友人に鞭で打たれた車夫は微笑した。微笑の意味を直覺した友人は直ちに機嫌を直

した。車夫の微笑はかう語つてゐたのである。「大層惡うございました。お腹立は御尤もです。存分お打ち下さい。私がいけなかつたのですから」。

しかし、如何に貧しく身分の卑しい日本人でも、無理の前には從順でない事は理解して置くべきである。彼の表面の從順性は主に彼の道德觀念に根ざしてゐる。戯れに日本人をなぐつてみる、當然、外國人は重大なる過失をしたことに氣がつくであらう。日本人は斷じて愚弄さるべきでない。日本人を愚弄しようと亂暴にも試みた人で、つまらなくその生命をおとした者は幾人もある。日本人の微笑は菩薩の微笑と同じ思想、卽ち、自己抑制と自己征服から生ずる幸福を表してゐるのである。

（知られぬ日本の面影）

山田孝雄
文學博士
明治十年生

一七 言葉

山田孝雄

言海に載せた語の總數は三萬九千一百三語であるが、その中純粹の國語卽ち和語は二萬一千八百十七語、漢語は一萬三千五百四十六語、唐音語は九十六語、梵語その他の外國語は四百五十三語となつてゐる。なほこの外に和漢の熟語その他の熟語があるが、これは暫く別にして、支那傳來のものなる唐音語を漢語の中に加へて、百分比を出して見ると、「和語六〇」「漢語三八」「その他の外來語二」卽ち固有語六、外來語四の比になる。

更にこれを名詞に限つて見れば、現代の普通語に於ては、漢語の方が固有の國語よりも量の多いといふ現象を見る。われわれが、朝起きて隣の人にはじめて逢ふ時、

今日は、結構なお天氣ですね。

などと挨拶をするが、この挨拶の言葉の中の觀念語はすべて漢語であつて、純なる國語は「は」「な」「お」「です」「ね」等の助詞・動詞などといはれる具象的の觀念内容のないものだけである。而もかやうなことは政治上・法制上・學術上の用語の上に甚だ著しくあらはれ、官職の名稱なども、上は内閣總理大臣より下は給仕に至るまで、みな漢語でよばれて、國語でよばれるものは小使ぐらゐのものに過ぎないのである。官廳の名稱でも大藏省の名だけぐらゐが、固有のもので、他は殆どすべて漢語である。漢語がかやうに勢力を得たのは、應神天皇の御世から今日に至るまで、千六百五十餘年の長い間漢籍がわが國に學ばれたからであるが、漢語以外の外國語も亦今は少からず用

れてゐる。即ち佛教の渡來と傳播とによつて、梵語が入り、葡萄牙人・西班牙人・和蘭人の渡來・交易とともに、葡萄牙語・西班牙語・和蘭語が輸入せられ、更に德川幕府末造に至つて、佛蘭西・英吉利・獨逸などの各國語が輸入せられて、それらの國々の語が少からずわが國語に同化せられ日常語化して、梵語から來た馬鹿とか旦那とか鉢とかいふ語や、葡萄牙語から來た合羽とか、亞鉛とか金米糖とか襦袢とかいふ語は、學者でない限り、誰も外國語だなどと思ふことなしに、國語として使用されてゐる程である。

然らば、わが國語は半ば外國語化してゐるかといふと決してさうではない。わが國語は、外來語に對して頗る寛容で、無制限にその流入を許してゐるやうに思はれるが、實は嚴密な

る境界線を立てて、その線内へは一歩たりとも侵入を許さないのである。今その境界線を示すと次の通りである。

名詞　數詞　これは外來語の流入の自由區域といひうる程寛大である。

情態の副詞　これも亦頗る自由で、漢語から轉じたもの、たとへば、「漠然」「靜粛」等の語は純正國語の數と大差がない。

右の三種に於ては、漢語が汎濫してゐるといつてもよく、特に名詞については近世の西洋語がまた汎濫してゐるともいひうるやうである。

代名詞　これは過去に於ては、漢語が隨分跋扈してゐたが、現今の口語では「僕」だけが殘つてゐる。

以上は外來語が本の形のまゝで入りうる範圍であるが、こ

の外の區域へは外國語はそのまゝの形で入ることを許されない。

形容詞　動詞　すべて用言には外來語そのまゝの形が用ひられた例はない。しかし、外來語を語幹にして作つた用言は多い。又サ行三段活用が外來語を伴なつて動詞として活動することは古來からあつたが、現代は殊にそれが多い。

以上は外來語の歸化を許された區域であるが、形質ともに國語化することが歸化の際の絶對條件とされてゐて、この規律は嚴重に守られてゐる。

接續の副詞（「また」「或は」の類）

感動の副詞（「あゝ」「おゝ」「いざ」の類）

助詞（人がの「が」花はの「は」の類）

以上は外來語の侵入を斷じて許さない區域であつて、古來未だ曾て外來語の窺覦を許したことがない。

かくの如くわが國語は、文法上語の種類によつて、外來語を寛大に見る區域と、一歩も入れない區域と、國語の形に同化すれば入れる區域との三樣があつて、これは古來嚴密に守られて來た。私はこの外來語の窺覦を許さない區域を、國語の「要塞地帶」といつたことがあるが、それらの區域をなす境界は、近時の流行語にいふ生命線といふ言葉にもあたるであらう。

なほ上述の如く、外國語の名詞に侵入の自由を許してゐると見られる點も、更によく考へてみると、決して國語の法格に觸れることまで許してゐるものでないことがわかる。即ち

わが國語の名詞は、文法上の性・數・格を具有せず、いはば裸體的の概念語であつて、それが文法的に活動するやうになるのは、主として助詞の力によつてゐるのである。それ故、かゝる區域へ外來語が飛込んで來ても、その外來語が、その本國語の文法的性格を振廻さず、裸體になつて、おとなしくわが助詞に操縱されるまゝになる時、これを許すのである。又、副詞にしても、名詞と略同樣である上に、意味が一層輕いから、その活動範圍も自然限られる。かうした語はいくら飛込んで來ても、觀念內容を殖やすだけで、國語の法格を紊すことは少しもない。かくて、外來語の侵入は漫然と許されてゐるのではなく、國語の性質上少しも差支ないから自由に放置されてゐることが明らかになる。

要するにわが國語が外來語に寛大でありうるのは、この「要塞地帶」が確實に保持せられてゐるからであつて、この「要塞地帶」内の部分こそ國語の精神の宿る所、國語の生命の源である。この精神が確立し、この生命が活力に充ち滿ちて居ればこそ、かの多大の名詞・副詞を自由に操縱し、又外來語を用言とする際、必ず國語化せしめねば承認せぬといふ態度を示して、夥しい外來語を消化して國語としてゐるのである。寛大さは同化しうる自信の存する所より生まれ、同化しうる力の源はこの「要塞地帶」より起つてゐる。かく一方には寛大さを示しつつも、「要塞地帶」を設けて、それより内へは一歩も侵入を許さず、あくまで國語の生命力を維持して行く嚴肅さは、國民の深く肝に銘じておくべき所である。

（國語と國民性）

野口米次郎
詩人
明治八年生

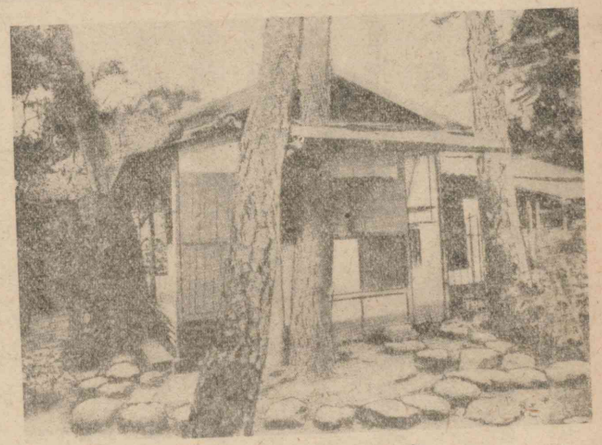
一八　神秘の日本

野口米次郎

外人が私の處へ來て、何か日本獨得のものが見たいといふ時、私はいつも茶席へ案内する。まづ飛石で路がついてゐる所謂露地に立たせる。そして「こゝは外面的世界を捨てて自己遍照に入る通路だ。」と説明する。ついで茶席を取卷く小さい庭を眺めさせ、幾百年の星霜を經て灰色になつてゐる老樹を指さして、「君はこゝに沈默の祝福があることを感ぜねばならぬ。私ども東洋人はすべての詩の最高潮を寂寞のなかに發見するのだ。寂寞の幽かな光に導かれて審美の恍惚に入るのだ。君はそれを理想の聖殿といつても、また唯美の悦樂境といつてもいゝ。その名前はどうであらうと、こゝは孤獨

に生きる無遍の住む處だ、宇宙の靈に合する處だ。」といふであらう。

それから古びた花崗岩の燈籠が、聖人か、哲人か、詩人ででもあるやうに蹲つてゐる姿に注意させて、「この燈籠の心の中には眞理を照らす所謂燈臺（ビーコンライト）の灯がある。この光は人に社會の狂瀾怒濤をどうして忘れるかを教へるであらう、また人生の廢墟と塵埃とを、どうして脱するかを教へるでもあらう、どうして私どもが清澄な默禱の雰

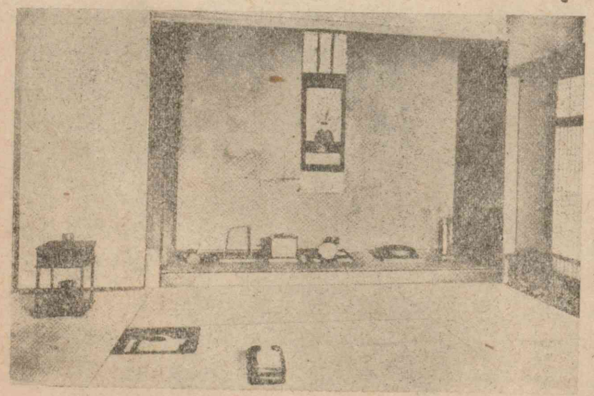


實相院茶室

圍氣を作るかを教へるであらう、またどうして茶道に入るかを教へるでもあらう」と告げよう。

更に私は、「茶席の床が地面に接近して低く作られてゐて、私どもが自然を足下から眺めて敬禮することが出來るやうになつてゐる」と語り、また、「茶席の庇が低く作られてゐて、その小暗い空氣は思想や想像を一點に集中させるに便ならしめる」といふであらう。

それから、私は彼を茶席の内へ案内して、氣味の悪いくらゐつめたい疊の上にすわらせ、そし



妙喜庵茶室内部

て「眼を閉ぢて默想せよ。」と彼に強ひる。彼は私のいふがまゝにする。私は「どうだね、默想の神祕は君に清淨界を與へたか。君の靈は無礙自在を得たか。私どもがこゝで創造しようとする甘い靜かな恍惚境に對して、君は何と思ふか。」といつてみると、彼は漠然と微笑を洩らすのみ、一言も發することが出來ないであらう。なるほど東洋、否、日本審美觀を理會することが出來る感情の所有者でない限りは、大概の外國人は私の言葉を了解することが出來まい。了解することが出來ないのも無理はないと私は思ふ。なぜならば、この茶席卽ち茶道で暗示される日本の審美主義は、日本の古文化が極點まで發達したもので、自然と人生とを融和させて、それを單純化させた日本人の態度は、彼等外國人がこれまで夢にも見なかつた所

利休
千宗易
千家流茶道の祖
豐太閤の茶道の師
二二五一年歿

のものだからである。故に人が私に「日本で一番特色のあるものは何であるか。」と尋ねたならば、私は直に茶席を擧げる、否、茶席を背景とした日本人の審美的態度そのものを擧げるであらう。

私はこゝで、私が嘗て書物で讀んだことのある一つの物語を話さう。それは宗匠利休が太閤秀吉を「朝顏の茶」に招待した話である。利休時代には朝顏は至つて珍しいものであつたことはいふまでもない。利休の庭には朝顏が澤山植ゑてあつたが、太閤が來る

千利休像

ときまつた當日になつて、茶の宗匠利休はその朝顔を悉く切つて捨てさせてしまつた。秀吉はお茶より朝顔の花が見たいので利休の招待を受けたのであつた。然るに利休の家へ來て見ると、朝顔は一つも彼の眼に觸れなかつた。彼は頗る不興の體で茶席の方へ歩みを進めた。そして利休に、「お前の自慢の朝顔は何處に植ゑてあるのか」と詰問した。利休は無言であつた。太閤は更に一層不興の顔を顰めながら茶席に入つた。茶席に入つて座に著いて、その顔を床の間の方へ向けると、朝顔の花一輪が妖婉な姿をそこに現して居つた。恰も忘れられた日光の一片が床の間に輝いてゐるといふやうな工合に見えた。太閤の喜びは非常なものであつたに相違ないが、話はさう詳細に渉るに及ばぬ。要は利休が多くの朝

光悅
姓は本阿彌
江戸初期の工
藝家　茶人
二二九七年歿

宗達
姓は俵屋
江戸初期の畫
家

光琳
姓は尾形
江戸中期の畫
家
光琳派の祖
二三七六年歿

顔を庭から取捨てて、たつた一輪の朝顔を生かした點にある。この利休の處置は、實に芳しい藝術的態度であるといはねばならぬ。私は利休を茶人としてよりも寧ろ廣い意味での詩人として敬意を拂ふものである。この態度は九十九枚の繪を燒いて一枚だけを取つて置く美術家の態度である。私は光悅や宗達や光琳はこの態度の人であつたに相違ないと思ふ。庭の朝顔を捨ててしまつた利休の態度は、九十九の作を捨てて一つの發句だけを殘さうとする俳人の態度である。私は確にこの態度こそは日本の永い文化が產んだ最も偉大なもので、優に世界に誇ることが出來るものと信ずる。

床の間の上で一本の草花が歌ふ獨唱に、何たる孤獨の權威があるであらう。この孤獨は感激が靜止した心理狀態で、そ

の歌ふラプソデーに麗しい抽象的な神祕がある、暗示がある。その中から精神的雰圍氣が夢のやうに幻のやうに放散せられることを感ずる。獨唱の生活には自己の保全がある。人格の充實がある。私ども日本人の古い文化が產んだ藝術家は、畫家であれ、歌人であれ、また俳人であれ、悉く獨唱的生活の信者であり、また歎美者であつた。その生活の中から永遠不朽の藝術が生まれたのである。

獨唱家なればこそ、利休は偉人であつた。光悅は偉人であつた。芭蕉は偉人であつた。この獨唱的態度から、日本の茶席は生まれた、繪畫は生まれた、俳句は生まれた。若し今日の日本にこの態度がなく、またこの態度の藝術家がないとすると、日本の藝術國としての特徵は、既に亡びたものである。新

新古今集
新古今和歌集
二十卷
一八六五年撰進
撰者藤原定家
他四人

古今集にある定家の歌に、「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれ」とあるが、孤獨に生きる無遍的寂寞味は、日本藝術が最高潮に達した場合である。寂寞のうちに靈の無礙自在を發見して、人生の恍惚に入るといふことは、日本人が見出した詩の神祕でなくて何であらう。今日の日本人が、この神祕を失ひつゝあることを、私は遺憾に思ふ。一度この神祕を失つたが最後、二度とそれを取りかへすことは出來ない。或は變つた神祕を發見するかも知れないが、その時が來るまで詩の上での亡國といはねばならない。私は亡國民となりたくない。私はどこまでも私どもの祖先が創造した詩の神祕を握つてゐたい。

（日本國民讀本）

一九 忠孝一本

我が國の孝は、人倫自然の關係を更に高めて、よく國體に合致するところに眞の特色が存する。我が國は一大家族國家であつて、皇室は臣民の宗家にましまし、國家生活の中心であらせられる。臣民は祖先に對する敬慕の情を以て、宗家たる皇室を崇敬し奉り、天皇は臣民を赤子として愛しみ給ふのである。雄略天皇の御遺詔に「義は乃ち君臣、情は父子を兼ぬ」と仰せられてあるのは、歷代天皇の大御心である。即ち君臣の關係は公であつて、義によつて結ばれるのであるが、それが單なる義にのみ止らず、父子と等しき情によつて結ばれてゐることを宣べさせられたのである。「わたくし」に對する「おほやけ」は大家を意味するのであつて、國即ち家の意味を現してゐる。

雄略天皇
第二十一代

我等の祖先は歷代天皇の天業恢弘を翼贊し奉つたのであるから、我等が天皇に忠節の誠を致すことは、即ち祖先の遺風を顯すものであつて、これ、やがて父祖に孝なる所以である。我が國に於ては忠を離れて孝は存せず、孝は忠をその根本としてゐる。國體に基づく忠孝一本の道理がこゝに美しく輝いてゐる。吉田松陰が士規七則の中に、

人君民を養ひ、以て祖業を續ぐ、臣民君に忠に、以て父の志を繼ぐ、君臣一體、忠孝一致は、唯吾國のみ然りとなす。

といつてゐるのは、忠孝一本の道を極めて適切に述べたものである。

支那の如きも孝道を重んじて、孝は百行の本といひ、又印度に於ても父母の恩を説いてゐるが、その孝道は、國に連なり、國を基とするものではない。孝は東洋道德の特色であるが、それが更に忠と一つとなるところに、我が國の道德の特色があり、世界にその類例を見ないものとなつてゐる。從つてこの根本の要點を失つたものは、我が國の孝道ではあり得ない。武士の名乘がその家の皇室に出づることを名乘り、又家憲・家訓が皇室に對し奉る關係をその遠い源とした如きは、全く同じ道理に出づるものと見るべきである。

佐久良東雄の

すめろぎにつかへまつれと我を生みし我が垂乳根は尊くありけり

といふ歌は、孝が忠に高められて、始めてまことの孝となることを示すものである。乃木大將夫妻がその子二人までも御國のために獻げて、而も家門の名譽としたのも、家國一體・忠孝一本の心の現れである。かく忠孝一本の道によつて臣民が盡くす心は、天皇の御仁慈の大御心と一となつて君民相和の實が擧げられ、我が國の無限の發展の根本の力となる。

まことに忠孝一本は、我が國體の精華であつて、國民道德の要諦である。而して國體は獨り道德のみならず、廣く政治・經濟・產業等のあらゆる部門の根柢をなしてゐる。從つて忠孝一本の大道は、これらの國家生活・國民生活のあらゆる實際的方面に於て顯現しなければならぬ。我等國民はこの宏大にして無窮なる國體の體現のために、彌〻忠に彌〻孝に努め勵まな

ければならぬ。

（文部省著「國體の本義」）

改訂 新女子國文 四年制 卷八終

昭和十二年六月十七日印刷
昭和十二年六月二十一日發行
昭和十二年十二月二十六日訂正再版印刷
昭和十二年十二月二十六日訂正再版發行
昭和十四年十一月二十一日訂正三版印刷
昭和十四年十一月二十七日訂正三版發行
昭和十五年一十月十四日訂正四版印刷
昭和十五年一十月十八日訂正四版發行
昭和十六年七月三十一日訂正五版印刷
昭和十六年八月三日訂正五版發行

改訂 新女子國文 四年制
定價卷一・二・三・四・五・六・七・八各金六拾錢

編者 久松潛一
東京市牛込區拂方町二十七番地
發行者 佐藤正叟
東京市京橋區銀座西二丁目三番地
印刷者 高橋郁

不許複製

發行所 東京市牛込區拂方町二十七番地
振替東京二九五〇七番
至文堂
電話牛込(31)四四五五番 四四四五六番

三協印刷株式會社印刷

「エンギ　コトバ　ブッカク　ヨる　ジユクゴ
モナロン　ヨイテン　カズイ　キッチョウ　カヘる
ヒキン　ミノカワバ　クベる　コウワイ
イワウ　ナゾ　ヨソ　シユウギ　ナンテン
モウジヤ　イイイ　イた　オヨそ　マネ
ハクチ　ケンジヤウ　ハクホウ　ツルカメ
ソウイ　モナ　フジク　ゴクモツ　シボヨな
シダ　ダイダイ　ユダリハ　ハンジヨウ　コンブ
カツラブシ　ヨキナコウシ　イみサける　キラフ
スタる「ヤリ　スキ　ヌスまれる　ダく
ノオイノ　トウワク　ムチ　トツカ　バシヨウ」
「オポイ」
シンヨクサンジン　ナンポ　ブキ　カイネン　ゴバン
サワラビ　ニギりコブシ　タイヤテイリユウ　カホウ
クタビレ　ババキンラチ　シガ　カラゴロモチクリ
コシユウ　ブンカク　コブシ　シカゾベマガヨ
カンニンブクロ　トウフ　アカラクンユウ
モトノモクアミ　ヤドヤメシモり　ハクリカンリ
ボウン「アツサユミ　アベノ　シモツキ　アカツキ
ハダヘー　スギカヘ　アメへる　キツ　リヨウす
シキダイ　ニショクイ　四ゲヨウヒウテ　ムゆデ

キナリ　ラカしウべはる　ホウキ　ツゞく　サヘワヒ
メカミ　ニユウショウ　ネンソトウ　モヨホシゾイ
カナふ　シツジ　コウフムサシイカミモロナホ
エチゴノカミ　モロヤス　ウンカ　ヨド　ニヤテイ
四ジョウチュウナゴン　タカスケキヨウ　オウジヤク
クダく　シンキン　ギヤクシン　セツシュウ　ミトガワ
マカリナる　フゲ　ユイゴン　ブリヤク　カヒ
ソシリ　ウダイ　オカされ　リヨウガン
ヨロヒ　カけるデンいウ　ノオン　又うす
スナワち　ミス　マく　ゴルワしく　ショいツ
シヨウリン　エイリヨ　イキドホり　イするルダイ
ニンニヨウ　アニピ　イヘドも　ナンゲ　ココウ
ツツンた　ワダシボケイ　ゴビヨウ　ナンギ
イトマ　ミヨイリドウ　カベイヲ　カコチヨウ
マヅサユミ　ギヤクジユ　ビンバツ「ケンムノチユウヨウ
カツて　テツジン　ヒンす　ガイゼンダラ
シヨウドウ　オちる　タクケンノ弧ユウ
ニカウして　カツパ　イワく　ヨゴり
トヒエンキヨウ　スデ　カレイ　ヘイ　くワヒ
ウナウ　ケツヨウ　モウヲク　ウラみ